京都美術工芸大学 大学院修士研究 梗概集

第2号

建築学研究科建築学専攻

2023

The Summaries of Master's Research

Major of Architecture of

Graduate School of Architecture

KYOTO ARTS AND CRAFTS

UNIVERSITY

vol.2

梗概集の刊行に寄せて

京都美術工芸大学

学長

竹脇 出

京都美術工芸大学では、2012年の開学から11年が経過し、2022年度に建築学部、2023年度に芸術学部が開設され、2学部体制が確立されました。「卒業制作梗概集」と「大学院修士研究梗概集」は昨年度に第1号が刊行され、今年度第2号を発刊することになりました。

本梗概集に収録している卒業制作と修士研究は、多岐にわたる内容について、教員の指導に基づく学生の日々の学習の集大成を纏めたものであり、学生が精力を傾注した成果の概要を垣間見ることができるものと期待します。

最後になりましたが、梗概集編集部会をはじめ刊行に際してご尽力された皆様に心よりお礼申し上げる とともに、今後本学を志望する高校生や大学生にとって貴重なものとなることを祈念します。



目次

大学院 建築学研究科 2023年度

M21005	大石 勇典	民間近代建築の継承に資する建築の一斉公開イベントのあり方に関する研究	4
M22001	青木 遥	優しい建築とともに一布建築による HSP 特性を包み込む心理的空間— ※1	8
M22002	河北 篤人	既存ストックとしての廃校の有効活用について~元京都市立陶化小学校を対象として~	12
M22004	夏山 貴光	東北における巨大防潮堤を活用した復興提案―隔絶する巨壁からしなやかな風景へと―※2	16
M22005	古川 柊平	蔭による道のなかのスローな場	20
M22006	薮下 和真	旧島田小学校と増田思想『風景』の言説との関係性についての考察―旧島田小学校と NT	24
		H 計画案との比較から一	

※1 優秀賞(設計部門)※2 優秀賞(設計部門)

大学院 建築学研究科 2023年度

民間近代建築の継承に資する建築の一斉公開イベントのあり方に関する研究

学籍番号 M21005

名 前 垂谷勇典

指導教員 生川慶一郎

建築公開イベント オープンハウス 保全・継承

シビックプライド 建築鑑賞 モダン建築

1. 研究の背景

市民の建築への理解を助ける実践として、1992年にロンドンで始まった建築の一斉公開イベント「オープンハウス」が有名である。日本においても、生きた建築ミュージアム大阪、アーキウォーク広島、福岡建築ファウンデーションをはじめとして、2023年には、東京建築アクセスポイントが日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞するなど、建築ツア一等の実践的なプログラムを通じた市民に向けた建築文化の普及活動が注目を集めている。このように地域資源として建築物の価値が市民に共有されていくことは素晴らしいことではあるが、本質的な建築物の継承の問題として、特に民間建築の場合、所有者意識こそ重要と考える。一斉公開という手法は、所有者にとって社会的評価を受ける有意義な機会ともいえるが一方で、社会的責務を感じる心理的負担を生じさせる諸刃の刃とも言える。

2. 研究の目的と方法

本研究では、2022年に京都で始まった京都モダン建築祭を対象に、2023年度の企画・運営に参画し、公開を検討する所有者と伴走することで、建築の一斉公開イベントが所有者の近代建築に対する継承意識にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的としている。

1つ目では、東京建築アクセスポイント、京都モダン建築祭、生きた建築ミュージアム大阪、アーキウォーク広島、福岡建築ファウンデーションを対象に、イベント関連の講演会、セミナー等への参加、発行書籍等により、個々の活動について、その活動の発祥、目的、実績からその特徴を整理する。特に、民間建築を対象とした取組みに着目し、建築一斉公開イベントの実態(対象建物の拡がり方等)について考察する。

続く2つ目では、近代建築の保全・継承における建築の一斉公開イベントの位置付け〜大阪における事例から〜大阪市役所、大阪市中央公会堂、大阪中央郵便局の保全運動と、船場HOPE ゾーンの取組の関係性、生きた建築ミュージアム大阪への展開について、時系列で整理しながら、それらの関係性について考察する。

そして3つ目では、地域性を反映させた建築一斉公開イベントの あり方についてを明らかにするため、生きた建築ミュージアム大阪 から京都モダン建築祭までの流れ。また、今年新に開催される神 戸モダン建築祭についてのプロセスについて記述する。

最後に4つ目では、2023年11月2日~12日に開催される京都モダン建築祭の運営に参画し、民間建築の保全・継承に資する建築の一斉公開イベントのあり方について、一斉公開イベントの関係者にヒアリングを行い、その実態から考察・提案を行う。

3. 日本における建築一斉公開イベントの現状

(1)世界的な公開イベント・建築教育に関する研究

世界的な建築の公開イベント・建築教育に関する運動として、 Open House LondonとChicago Architecture Centerが挙げられる。

前者のOpen House Londonは、1992年、オープン・シティという非営利組織が建物を巡るツアーを行ったことが始まりで、歴史的な建造物に比べて現代建築が圧倒的に軽視されており、創造性が損なわれてしまうことを危惧した建築関係者によって設立された。そこから年に1度2日間、ロンドンの魅力ある建築を一斉に無料で公開されている。市民が市内の建物を直接体感する機会となっており、建築を体験する、対話をする、自分たちの問題を自分たちで考える姿勢を育む、そして政策提言までつなぐことを目的としている。さらに、建築公開イベントの国際的なネットワークOpen House Worldwideの母体となっており、世界で50以上の組織が参加し、同様の活動を行っている。

一方のChicago Architecture Centerは、1966年、アメリカの建築家であるヘンリー・ホブソン・リチャードソンが設計した都市住宅のグレスナー邸を保存することを目的にシカゴ建築財団が設立された。Chicago Architecture Centerは、有料であるが、だれでも参加できる建築ツアーを随時開催している。ここでは、デザインが重要である理由を発見することを目的としており、常設の博物館での展示と年に7,000以上提供されるワークショップやプログラム、コンテスト、メンタリングなどにより建築の物語を共有している。さらにAssociation of Architecture Organizationsという国際的な組織の母体ともなっており、ここでは、建築、計画、設計を促進する組織や個人を結びつけ、支援し、擁護する国際的なメンバーベースのネットワークとして機能している。

活動団体	Open House London	Chicago Architecture Center
活動期間	1年に1度2日間	随時
費用	無料	有料
目的	市民が市内の建物を直接体感すること	デザインが重要で ある理由を発見す ること

(表1)運動の内容と目的

(2)日本における建築一斉公開イベントの現状

近年、国内でも同様の活動が広がりつつあり、さらには、2022年10月に、建築一斉公開イベントを開催している5団体(生きた建築ミュージアム大阪、オープンナガヤ大阪、東京建築アクセスポイント、ひろしまたてものがたりフェスタ、福岡建築ファウンデーション)が福岡に集合し、「ジャパンオープンハウスサミットin fukuoka」が開催された。そこでは、各建築一斉公開イベントの開催の経緯・目

的・運営方法などが発表された。さらに、何を対象にするのか、どのような組織で運営するのか、広報(どのように伝えていくのか)などについて議論が交わされるなど横の繋がりが強くなりつつある。また、運営主体は、行政機関、教育機関、市民団体、社団法人、NPO法人など様々であり、普段は建築ツアーを行っている団体と行政が協力して開催するケースや行政機関から独立して委員会として運営しているイベントなどもある。

組織名	イベント名	初開催年
大阪市立大学(現大阪 公立大学)	オープンナガヤ大 阪	2011年
20213年~2015年 大阪市 2016年~現在 生きた建築ミュージアム 大阪実行委員会	生きた建築ミュージ アムフェスティバル 大阪	2013年
2015年~2017年 広島県 2018年~現在 ひろしまたてものがたり フェスタ	ひろしまたてものが たりフェスタ	2015年
東京建築アクセスポイント	オープンしなけん 普段は有料の建築 ツアー	2019年
京都モダン建築祭実行委員会	京都モダン建築祭	2022年
神戸モダン建築祭実行 委員会	神戸モダン建築祭	2023年
福岡建築ファウンデー ション	会員制の建築ツ アーを随時	2009年

(表2)国内における建築公開イベントの基本情報

一般財団法人である東京建築アクセスポイントとNPO法人である 福岡建築ファウンデーションでは、随時有料の建築ツアーを行っ ている。また、京都モダン建築祭の事務局を担っているまいまい京 都では、京都を中心に有料のミニツアーを開催している。

4. 近代建築の保全・継承における建築の一斉公開イベントの現

建物は市民のひろい評価が必要であり専門家による文化財評価だけでは保存できないという仮説をもとに、近代建築の保全・継承における建築の一斉公開イベントの位置付けを、主に文献調査、既往研究により近代建築の保存運動から始まり、建築の一斉公開イベントに至る歴史的経緯を大阪を事例に考察する。

(1)中之島東部地区の保存運動について

①市民運動のきっかけとなったのは、昭和46年(1971)6月に「新市庁舎建設計画」の計画内容が新聞で報道されたことである。その内容は、市庁舎から公会堂までの一帯を人工地盤を使った超高層ビルに建て替えるという内容であった。この市民運動は、大阪市中央公会堂の保存に向けての議論が進められるようになった1990年頃まで約20年続けられた。

②これに対し、建築学会や建築士協会、大阪府の教育委員会などを含む様々な団体から意見書や要望書が提出されるなどの動きがあった。その中でも、最も大きな動きをみせたのは、新建築家技術者集団(以下新建)である。新建の大阪支部は、1971年(昭和46年)10月に「中之島研究会」を発足し、5つの建築物(日本銀行大阪支店、大阪市役所庁舎、大阪府立中之島図書館、大阪市中央公会堂、大阪港等地方裁判所)を「歴史的遺産」ととらえ、これを保存することを目標に研究と保存運動を開始した。

保存活動のなかで、文化財保護のように凍結保存するだけでは

解決できない問題であり、さらに「現代特有の都市問題」も同時に含んでいる状況にあることが明確になったことに加え、「運動の中心となっていくのは市民であって、建築界だけの狭い殻を破らない限り成功はしない」という考えから、中之島の歴史的環境の概念などの理論構築とともに、中之島の歴史や文化、伝統などを市民に知ってもらう活動が進められた。

また、そして市民の力を東ねる組織として、1972年(昭和47年)10月に「中之島をまもる会」が設立され、公会堂で設立集会が開かれ市民、文化人、学者が集まり、170人が参加した。さらに翌年には、中之島を市民活動の場として生かすために「中之島まつり」を開催することとなり、1973年(昭和48年)5月5日のこどもの日に「市民のつくるフェスティバル」をテーマに、初めて開催された。歩行者天国となった中之島東部には3万人が集まった。この保存運動から生まれた中之島まつりは、毎年5月に開催されており2023年で開催50回目を迎えた。

③保存運動後の結果としては、大阪市役所庁舎は建替えられたものの当初の計画から周辺に配慮した計画へと変更され、日本銀行大阪支店は外壁の保存と一部の部屋が復元された。また、大阪府立中之島図書館は国の重要文化財にしていされ保存されることが決まった。そして、大阪市中央公会堂は、2002年に保存再生工事が完了し、同年12月には、国の重要文化財に指定された。

さらに、保存運動は建築の保存にとどまらず、地区制度や地盤 沈下、川の上を走る高速道路、水質汚染、文化施設や緑地の少 なさなど様々な社会問題も議論されることとなった。そして、現在で は公会堂の前面道路が歩行者空間として生まれ変わり、子どもの 森中之島、中之島美術館などができたことによりさらにより良い都 市空間へと生まれ変わっている。

(2)大阪市中央郵便局の保存運動について

①大阪中央郵便局をめぐる保存運動は、国の資産であったため 不動産運用を行うことが出来なかったが、郵政の民営化により不 動産活用が可能になったこと2006年5月2日に東京や大阪の中央 郵便局の再開発事業の計画が発表後、東京中央郵便局の保存 運動と連帯して大規模に展開された。

一般的には、建替えや取り壊しの計画が公表されてから要望書が提出されることが多いが、東京中央郵便局、大阪中央郵便局は、再開発の計画が公表される以前から日本建築学会や日本建築家協会、DOCOMOMO JAPANなどから総務省、日本郵政、日本郵政公社に幾度か保存要望書が提出されていた。

②計画発表後は、国会議員や多くの市民も運動に参加し、超党 派の25名が立ち上げた団体である「東京中央郵便局を国指定の 重要文化財にし、首都東京の顔として将来世代のために、末永く 保存・活用を進める国会議員の会」や2008年3月25日に大学教 授、DOCOMOMO JAPAN幹事長、「赤レンガの東京駅を愛する市 民の会」、「東京の顔「丸の内」を守る会」、「建築家、文化学院を愛 する会」などの市民団体に所属するメンバーなどの市民や建築 家、研究者らによって設立された「東京中央郵便局を重要文化財 にする会」が挙げられる。さらに、2009年3月中旬に東京中央郵 便局の解体が始まったことをきっかけに、3月26日に東京から独立 した運動体として「大阪中央郵便局を重要文化財にする会」が発 足した。解体準備が進む状況の中、2012年6月18日に最後の手段 として国(文部科学省)を被告とする行政事件訴訟法上の義務付 け訴訟を提起した。訴えたのは、「大阪中央郵便局を守る会」の中 心メンバーとして活動を続けてきた高岡伸一、倉方俊輔、鈴木博 之、前田茂樹、松隈洋の5名である。

裁判を起こした理由は2つあり、一つは大阪中央郵便局の解体を 止めること。もう一つは、歴史的建築物が次々と失われていくなか で同じことが繰り返されないよう文化財保護を巡る根本的な問題を 解決することである。また、解体に対して直接の利害関係にない一 般市民や専門家の立場では建物の所有者である郵便局やその持 ち株会社である日本郵政を訴え、直接解体工事を求める訴えは裁 判を起こす資格がないと判断されてしまう可能性が高かった。そこ で、文部科学省が大阪中央郵便局を重要文化財に指定すること によって工事を中止させようとしたのである。

③結果として、訴えは認められず、2012年3月に解体されたが、一 部分が保存されることとなった。この保存運動では、都市部の再開 発に対する保存の難しさに加え、民営化した公共事業団体の資産 活用の問題、都市の長期的持続性と建築の更新の問題など、広 範な課題について問題提起をしている。

鈴木博之	建築史家,青山学院大学教授, DOCOMOMO Japan代表,明治村館長			
松隈洋	建築史家,京都工芸繊維大学教授			
高岡伸一	建築家,大阪市立大学特任講師			
前田茂樹	建築家,大阪工業大学専任講師			
倉方俊輔	建築史家, 大阪市立大学准教授			
弁護団団長	中川元弁護士			
大阪弁護士会の都市環境部会に所属する弁護士を中心と				

した弁護団

(表3)義務付け訴訟を起こしたメンバー

義務付け訴訟を起こしたメンバーである倉方俊輔、高岡伸一は、 生きた建築ミュージアム大阪実行委員会の委員である。

5. 地域性を反映させた建築一斉公開イベントのあり方について 地域性を反映させた建築一斉公開イベントのあり方についてを 明らかにするため、生きた建築ミュージアム大阪から京都モダン建 築祭までの流れ。また、今年新に開催される神戸モダン建築祭に ついてのプロセスについて記述する。

(1)イケフェスについて

2012(平成24)年、大阪市の「都市魅力創造戦略」で定められた 主要プロジェクトとして、大阪市内の公的な歴史的遺産の活用の 動きとあわせ、近代建築をはじめとする民間歴史的建築物の再 生・活用を促進することとなった。

そこで、「大阪の歴史・文化、市民の暮らしぶりといった都市の営 みの証であり、様々な形で変化・発展しながら、今も生き生きとその 魅力を物語る建築物等」のことを「生きた建築」として新たに定義さ れた。さらに、大阪のまちを1つの大きなミュージアムと捉え、そこ に存在する「生きた建築」を通して見えてくる、多様で豊かな都市 の物語性を大阪の新しい魅力として創造・発信しようとする取組み で、選定・再生・活用の3段階で行われている。

そして、2013年から「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」 として、一年に二日間限定で建築の一斉公開イベントが行われて いる。さらに、2019年からはオープンハウスワールドワイドに参加 し、世界中のオープンハウスをしている都市との横連携が始まっ た。

(2)京都モダン建築祭について

2021年9月25日から同年12月26日まで京都市京セラ美術館に おいて、開館一周年を記念して『モダン建築の京都』が開催され、 京都に現存する明治、大正、昭和の「モダン建築」7セクション、36 プロジェクトが貴重な資料とともに紹介された。それを契機に、文 化庁京都移転記念事業に発展し、京都市と民間団体が連携して 京都に現存するモダン建築を一斉公開する『京都モダン建築祭』 が誕生した。

初開催の2022年度は、のべ約3万人の参加があり、京都におけ る建築の新たな一大イベントとして反響を呼び、2023年度(11月2 ~12日)は、期間・エリアを拡大し、サポーター&パートナーを募 集、オフィシャルクラブを発足させるなど、参加機会のさらなる拡充 を目指している。

6.京都モダン建築祭でのアクションリサーチ

『モダン建築の京都』の中で、京都府住宅供給公社堀川団地 (以下、堀川団地)が「Section 住まいとモダン・コミュニティ」の対象 建築として選出されたことから、所有者である京都府住宅供給公 社の承認を得て2023年度京都モダン建築祭に参加することとな り、特別ガイドツアー、パスポート公開の対象なった。

堀川団地は、本学の髙田光雄教授を筆頭に生川慶一郎教授が 地域まちづくりと連動した再生に取り組んできた経緯もあることか ら、京都美術大学として京都モダン建築祭における堀川団地の一 斉公開イベントを実施することとなり、運営側の立場として民間建 築の保全継承に与える影響をアクションリサーチする。

(1)堀川団地公開イベント参加者に対する意識調査 ①調査方法

以下の京都モダン建築祭の堀川団地公開イベント参加者(計 106名)を対象に、建築一斉公開イベントによる堀川団地の保全・ 継承に関するアンケート調査を実施した。

事前ツアー 10/22(日)14:00~16:00 18名 パスポート公開 11/4(土)10:00~16:00 14名×5組 特別ツアー 11/5(目)10:00~12:00 18名 ②アンケート内容

下記にアンケート項目を示す。

アンケート 項目

- 回答者属性(性別、年齢、居住地、職業、業界)
- 今回、参加された理由
- 堀川団地には魅力があるか。およびその具体的な魅力について
- 堀川団地を保全・継承していくべきか。およびその理由について
- 公開イベント参加による堀川団地の保全・継承に対する意識の変化
- 今後、堀川団地の一斉公開は、継続的に行った方が良いと思いますか?
- 京都モダン建築祭の活動は、民間の近代建築の保全・継承につながるか。
- 建築の公開イベントでどのような内容あれば、保全・継承につながるか。
- 京都モダン建築祭で参加また利用する(予定含む)プログラム等について
- ・民間建築の保全・継承における建築の一斉公開イベント に関する 自由意見

③回答者属性

年齡/性別	男性	女性	無回答	総計
20代	4	7		11
30代	6	10		16
40代	7	9		16
50代	5	20	1	26
60代	7	12	1	20
70代以上	1			1
総計	30	58	2	90

アンケートの回答率が85% (90/106)と非常に高く、堀川団地公 開イベント参加者の堀川団地の保全・継承に対する関心の高さが 伺える。回答者属性は、50代女性が最も多く、全体の2割強を占め ている。また、居住地は、京都市内、大阪府、滋賀県と京都府をは じめその隣接府県が多く、次いで関東となっている。職業の業界 は、建築以外が7割強であり、建築業界の3倍以上で、専門性に関 係なく広く市民が参加していることが明らかとなった。

職業/分野	建築業界	それ以外	無回答	総計
会社員	10	30	2	42
経営者・役員			1	1
自営業/自由業	1	5	1	7
公務員	1	10	1	12
学生	6	2		8
主婦		6		6
大学教員	1			1
大学職員		1		1
医療事務		1		1
無職		2		2
その他	1	7		8
無回答	1			1
総計	21	64	5	90

④堀川団地公開イベントに参加した理由

堀川団地の見学・ガイドツアーに参加した理由	人数
古い団地に関心があるため	48
今回、特別に公開されていたため	53
普段から身近に見ていて気になっていたため	22
以前住んでいたことがあったため	0
以前に訪れたことがあったため	6
たまたま今回のイベントを知ったため	7
友人等に紹介されたため	5
(その他)	
展示の設営に参加	4
テレビの特集で関心を持ちその後気になっていたから	1
モダン建築祭で知った	1
前にも展覧会があり、リノベーションが気になってました。	1
美術館でのモダン建築展で堀川団地に興味を持ったため	1
北大路に住んでいて身近だった	1

堀川団地公開イベントに参加した理由として、「今回特別に公開されていたため」が6割弱で最も高く、次いで「古い団地に関心があるため」が高くなっている。堀川団地の存在やその文化的価値について京都モダン建築祭の建築一斉公開イベントを通じて知ったことが推察される。

⑤堀川団地を保全・継承していくべき理由

堀川団地を保全・継承していくべき理由	そう思う (61)	ややそう思う (22)	合計 (90)	
築年数が経過し、成熟した外観となっている	34	6	40	44%
戦後復興期の時代を象徴した建物である	34	9	43	48%
豊かなコミュニティ,生活文化が蓄積されている	31	5	36	40%
昔を思い出す懐かしい団地である	21	6	27	30%
専門家が歴史的価値を評価している	20	5	25	28%
地域住民にとって愛着のある建物である	29	7	36	40%
現在も居住者がいて,現役で利用されている	33	11	44	49%

堀川団地を保全・継承していくべき理由	建築業界 (21)	それ以外 (64)	無回答 (5)	合計 (90)
築年数が経過し,成熟した外観となっている	8	28	4	40
戦後復興期の時代を象徴した建物である	7	34	2	43
豊かなコミュニティ,生活文化が蓄積されている	8	26	2	36
昔を思い出す懐かしい団地である	6	19	2	27
専門家が歴史的価値を評価している	3	20	2	25
地域住民にとって愛着のある建物である	10	24	2	36
現在も居住者がいて、現役で利用されている	13	30	1	44

堀川団地を保全・継承していくことについて、「そう思う」「ややそう 思う」の賛同が9割強を占めており、その理由としてその約半数が 「戦後復興期の時代を象徴した建物である」を挙げていることか ら、堀川団地の文化的価値が高く評価されていることが伺える。

また、「現在も居住者がいて、現役で利用されている」も多く選択されており、特に建築業界の参加者の占める割合が高いことから、歴史的建築物としての保存状態の良さだけではなく、現在も生きた建築として保全・継承されているところが重要であることも明らかとなった。

(2)所有者・仲介人へのヒアリング調査

京都モダン建築祭に参加し建築の一斉公開を実施したことによる所有者の意識の変化やその仲介役の役割について、以下の建築物を対象にヒアリングを行った。

•毎日新聞京都支局

11/20 17:00~ 野上支局長、南陽子記者 ヒアリング

•旧太田喜二郎邸

12/6 13:30~ 中田哲建築設計事務所+好日舎

•京都府住宅供給公社堀川団地

調整中 京都府住宅供給公社 池田業務部長、木原氏

・島津製作所旧本社ビル(フォーチュンガーデン京都)

調整中 Plan·Do·See Inc.

7. まとめと今後の課題

仲介者は、所有者が負担に感じるなどのマイナス面を事前に伝えるなどのサポートが可能である。さらに、仲介者は所有者へ建物の重要性などを伝えることができ、建物を保存する一助を担っていると考えられる。

そして、公開することによる他者の評価により、所有者の建物の 価値を再認識する機会にもなり、所有者の建物に対する誇りや愛 着を醸成することに繋がる。

仲介者の所属や立場は様々で、建築の関係者だけでなく運営 会社や学校職員、店の責任者など様々である。

さらに、今回のヒアリング調査では、事前ツアーなどで所有者の 負担にならないようなサポートができていたことが明らかとなった。

今後の課題としては、プランドゥーシー(島津製作所や丸福楼の 運営会社)、際コーポレーション(膳處漢ぽっちりや大傳梅梅の運 営会社)へのヒアリング調査ができていない為、このような運営会 社へのヒアリング調査をすることで類似する仲介者の役割がより明 らかになると推測できる。

また、今回アンケートやヒアリング調査を行った対象へも継続的 に同様の調査をすることにより、所有者意識の変化などを知るため にも必要であると考えられる。

8. 参考文献

- ・「004 特集 建築鑑賞」『建築雑誌』138,1770,pp.4-pp.47,2023.01・佐々木博美.「生きた建築・都市教育の実践」『建築雑誌』
- vol123,No.1574,pp.30,2008.3
- ・米澤総志、「国際化に伴い多様化する「オープンハウス」の運営手 法に関する研究」『大阪市立大学大学院 都市系専攻 修士論文 概要集』、2018.02
- ・高田昇「中之島公会堂議保存と再生(開発と保存諫事例解析)(< 特集>開発と保存議ダイナミックス)」『建築雑誌』

(1321).51-.1991-12

・大阪都市環境会議編『中之島・公会堂:よみがえる都市議鼓動』 都市文化社,1990.5

中之島をまもる会編『中之島: よみがえれわが都市』ナンバー出版 1974 4

- ・大阪歴史学会『特集 大阪中央郵便局庁舎の保存を巡って』,ヒストリア第220号,2010.6
- ・大阪府登録文化財所有者の会『商業利用の登録文化財建造物 の管理と社会的評価について』,2012.5
- ・髙岡伸一『大阪の近現代建築物のコモンズ化による都市再生手 法に関する研究』、学位論文、2017
- ・高岡 伸一, 嘉名 光市, 倉方 俊輔, 佐久間 康富『大阪市「生きた建築ミュージアム事業」の取り組みについての報告』,日本建築学会技術報告集22(51),pp.749-754,2016
- ・『大阪市「生きた建築ミュージアム事業」による建築文化の振興』 ・山口知恵、「大阪市内の建築物を2日間で一斉公開する:生きた 建築ミュージアム事業について」『CATS叢書』

11,pp.267-273,2017.03.07

- ・京都モダン建築祭実行委員会。『「京都モダン建築祭」開催決定!』2022.7.29
- ・前田尚武『「モダン建築の京都」展と連携企画』
- ・京都モダン建築祭実行委員会『2022年 京都モダン建築祭開催レポート』

優しい建築とともに

一布建築によるHSP特性を包み込む心理的空間-

 M22001
 青木遥

 指導教員
 安田光男

布建築 HSP 特性 ヒーリング空間

心理的避難場所 包み込む 優しさ

1. 序章

近年、「生きづらさ」という言葉をよく耳にすることがあ る。「生きづらさ」とは"不安や緊張を秘めながらも周囲を 気にして、無理をしながら自分を偽ってでも周りに合わせる ことを優先させる中で自己の意味や価値が希薄になり、自己 の固有性や主体性を見失い、やがて生きることに疲れて漫然 と生を肯定出来なくなっている状態"のことである。(A)わ が国では自殺志望者は増加し、自らの命を絶ちたいという希 望から犯罪に手を染めたり、巻き込まれるケースが後を絶た ない。一体どれだけの人が「生きづらさ」を抱えているのだ ろうか。そして第三者の私たちはこの現実にどう向き合って いくことが必要なのか。また「生きづらさ」と同様に HSP と いう言葉を頻繁に聞くようになった。HSP とは (Highly Sensitive Person) の略語であり、日本語に訳すと(とても繊 細な人)である。生まれ持った気質であり医学的に治療を行 う特性でもない。さらに繊細な感覚を持ち、場面ごとに深く 強い感情で物事を味わうことができる長所を持っている。し かし HSP がゆえに社会活動のなかでその敏感さが裏目に出て しまうこともある。目まぐるしく回るこの世の中には沢山の 情報に溢れ、刺激量が許容量を超えてしまうことにより、神 経が疲弊し自身の感情コントロールを行うことが困難になっ てしまう。そして自身の状態を理解できず、その時点で対処 が行えない為、結果的に「生きにくさ」を抱えてしまってい る人もいるのではないだろうか。そこで本研究では HSP 特性 の方に焦点を当て、社会活動の中で引き起こる「生きづらさ」 を少しでも和らげることを期待した布建築空間の研究を行っ た。

2-1. HSP概念とは

HSP とはアメリカの心理学者 Elain N Aron が提唱し、1996年に「The Highly Sensitive Person」(邦題「ささいなことにもすぐ「動揺」してしまうあなたへ(2008))が出版され多くの人から反響を受けた。HSP は近年提唱された概念の為、未だ研究の数が少なく生きづらさの詳細などの解明されていない。また認知度が低く、HSP 特性本人が認知していないことにより結果的に「生きにくさ」を抱えている人も多い。

2-2. HSPの特性について

HSP 特性の方は"感じる力が強く、人の感情・場の雰囲気

といった人間関係に関するものから、光や音・気温などの環境の変化などの「自分の外側にあるもの」はもちろん、体調や自分自身の気持ち、新しい思いついたアイデアなど「自分の内側に起きていること」もよく感じとる"(A)ことが出来る。これまでの特性の中に長所となるものもあれば、自分自身では対処できないような敏感さも持ち合わせてしまっている。提唱したアーロンによると HSP には4 大特性があると言われ、英語の頭文字をとり「DOES」と呼ばれている。

- ・D (Depth of processing: 深く処理をする)
- ・O (Being easily Overstimulated:過剰に刺激を受けやすい)
- ・E (Being both emotionally reactive.Generally and having high empathy in particular:全体的に感情の反応が強く、特の 共感力が高い)
- ・S (Being aware of subtle stimuli:些細な刺激を察知する) HSP は生まれ持った気質であり、生得的な特性として脳内で感覚情報を処理する過程において個人差があり、特に SPS (感覚処理感受性)が高いとされている。SPS が高いと繊細な感覚を持ち、容易に刺激過剰になる為ストレスが蓄積されやすく、精神的健康や主観的幸福感の低下につながり自尊感情が低い可能性がある。また HSP は全人口の 15~20%の割合でいるとされ少数派でもある。

2-3. HSPの大きな特徴

さらにアーロンが定義した4つのように特性と同じく、小児精神科の長沼のよると、HSP は5つの特徴があると言われている。 $^{(A)}$

- ① 刺激に敏感に反応する
- ② 人の影響を受けやすい
- ③ 直観力があり、ひらめきが強い
- ④ 慎重で自分のペースで行動することを好む
- ⑤ 内的生活を大事にする

①の特性では特に"外的刺激に反応する視覚. 聴覚. 嗅覚. 味覚. 触覚の外受容感覚の他に第六感(内受容感覚・身体感覚)である狭義の内蔵感覚、広義の姿勢や温感などを含めた自己感覚にも敏感である。"内受容感覚の敏感さは感情体験の鋭敏な身体反応を伴い、身体の些細な変化に振り回されやすく不安が身体の影響を及びやすいとされている。そのため心気症や身体表現性障害が合併するリスクが高まり、神経が

With gentle architecture - Psychological space that embraces HSP characteristics through fabric architecture -

Haruka Aoki

休まる機会を無くし強く疲弊しやすい"(A)とされている。②の特性では、外界と他者と自分を区別する外界への対立性意識の曖昧さが関係しており、HSP特性の方は"自他未分化傾向が強いため相手の志向性と自己の志向性の区別が曖昧となり、主体性を喪失した「過剰同調」となる危険性が高い"とされている。④の特性では、HSPは感覚が鋭敏でストレス耐性が低く疲弊しやすく、自己のペースで慎重に物事を進めることが出来る環境に身を置くことで本来の力を発揮できるとされている。(A)

2-4. HSP特性の社会活動での物理的な予防方法

HSP 特性を持った人が社会活動を行っていく際にこれまで話してきた短所と捉えられている特性を物理的に自己を守れる予防方法がある。これは多くの書籍や研究で考えられているものであり、実際に HSP の方が実践をし、改善が見込まれたものである。まず五感の内「鋭い感覚」の刺激から重点的に対処すると効果的とされている。(B)

- ①「視覚」→目から情報を取り入れやすい人は伊達メガネや使用メガネの度数を落とすことで、見る範囲を意図的に決め、情報を必要最低限に抑える。
- ②「聴覚」→耳から情報を取り入れやすい人はイヤホンや 心地よい音楽を聴く事で、必要以外の音を自らシャットダウ ンすることで疲弊が軽減される。
- ③「触覚」→苦手な環境や相手を肌から受け取りやすい人は、肌の露出を控え心地良い素材で身をまとうことが効果的とされている。さらにネガティブ感覚を跳ね返すように明るい色の服を着ることも良いとされている。
- ④「味覚」→刺激の強い食べ物は控え、自分に合う食べ物を見つけることも効果的と言われている。
- ⑤「嗅覚」→マスクや自分が心地よい匂いをまとい、外環境や電車での自己の嗅覚を鈍らせる。

3-1.『生きづらさ』を和らげる空間装置とは

これらのことから HSP 特性とは繊細であるがゆえに様々な環境に対して疲弊することが多い。また繊細さを短所と捉え生きづらさを抱えている方も多い。しかしその繊細さは時に長所となり、見方を変えれば幸せに生きていくための大きな力ともなり得る。そのためには生まれ持った気質を克服すべき課題として捉えるのではなく良いものとして考える必要がある。そこで今回は HSP が社会活動を行っていく上でとても敏感な気質により、困難な直面に遭遇することもあり得る場面をあらかじめ想定し、物理的に予防する布建築空間を街中に配置することで、少しでも敏感さを和らげることを期待した建築からのアプローチを行う。特に五感の中の「視覚」に目を向け、一時的な視線の抑制・パーソナルスペースの確保を期待し、新たな公共空間での過ごし方の提案も含む。同時に空間構成の素材に布を用いることにより、視覚的に外環境

と柔軟に分断しながら繋がりを持たせ安心感を生み出すこと、 建築の要素と布の役割要素を持たせ、互いが合わさることで 出来る布建築の考察を含めながら、心地良い空間が生まれる ことも期待する。

3-2. HSP特性を包み込む心理的空間

日々私たちは家と目的地(会社・遊び)を移動するために間の交通機関や街中を通る。しかし不特定多数の利用が想定される場所は効率性が求められるため、常に外部環境では刺激が多く、心を落ち着かせる場所は近くに存在しない。心身共に休められる場所があるとするならば、人通りの少ない死角空間や個室空間、屋外公園である。さらに個室トイレや試着室などが挙げられる。しかし外部環境から身体や心を刺激から守ってくれる、休息空間が街の中に必然的に存在するものではない。刺激過多に陥った時早急に和らげることが出来ないことは、HSP特性の方にとって長時間の外出時間が苦痛となり、その後の休息速度も低下する。たとえどんなに楽しい時間だとしても一定のラインを超えた以上、なかなか通常の状態に戻すことは難しく、外部環境や人との接触の刺激がより敏感となり、その結果自己嫌悪に陥ってしまう。

そこで今回は家と目的地の間にある街中に機能している要素の①駅の改札口(屋内)②歩道(半屋外)③ショッピングモール前の広場空間(不特定多数が利用する通行スペースで屋内)④歩道橋(半屋外)⑤公園(屋外)計五つの街要素の空間の中に布建築空間を設計することを今回の目的とする。HSP特性の方が日常生活の中で使用し、使用後も自身の特性を理解しながら、これからも自分らしく生きていけるようにと願う布建築とする。また社会の要素の中に組み込むことで、自身以外の特性を理解しながらも一人一人が自身と向き合える空間・時間を提供すること、そして誰もが自身に優しさを向けられるようにすることを最大の目的とする。

3-3. 今回提案する布建築空間について

今回考察した布建築は布に包まれた建築である。建築の要素では「建築の基盤となる(屋根・柱・基礎・レール)を持ち全体を支える役割を担う」布の要素では「空間認識・人々を繋げながら自身を守る(壁)の役割を担う」の二つの要素が支え合い構成されている。そして今回布建築の中に布で構成されている感情空間を落とし込み、それぞれに異なる素材を使用し、心理的な様々な変化をもたらすことを期待する。

3-4. 今回想定する配置敷地の基準

今回布建築空間を配置する敷地はその場所に特化している ものではなく、街の同じ要素を持つ場所に設置することを想 定している為、今回の敷地は仮敷地とする。今回想定する布 建築空間は刺激過多になりやすい不特定多数の人が集まり、 社会スピードが速い街の要素をピックアップし配置基準を設 けたうえで、仮敷地の選定を行った。今回提案を行う仮敷地

京都美術工芸大学院 建築学研究科 建築学専攻 2 年

*Kyoto Arts and Crafts University Graduate School Applied Art , Department of Architecture は大阪の中心部に位置する天王寺周辺とする。天王寺区では 四大商業施設に加え、四つの交通機関が通り、高層ビル街や 商業施設や娯楽施設も多く存在し、公園の機能を持つ要素な ど通勤者の他ファミリー層などの多彩な年代の活動の拠点と なっている。

①駅の改札口前(屋内)→立ち止まる人・進む人が混在しており、大多数・不特定多数が一時的に集まる場所。(JR 天王寺駅中央改札口前)②歩道(半屋外)→都市内にある横幅5m以上の歩道で、街中でスピードが止まることのない不特定多数が一日中通行目的の要素を持つ場所。(近鉄と JR を繋ぐ歩道)③広場空間(屋内)→ショッピングモール前の広場空間で、ある目的地に向かう人で溢れる、様々なスピードが合わさる場所。(あべのキューズモール地下一階に位置する入口前の空間)④歩道橋(半屋外)→大多数・不特定多数が行き交いながらも、周辺の環境から離れた混雑とは距離を持つ場所。(全ての商業施設を繋ぐ大歩道)⑤大公園(屋外)→様々な年代の不特定多数が個々の時間を過ごし、少しの時間滞在を目的とする場所。(天王寺芝生公園内にある大空間)

4-1. 今回提案する布建築空間の構成

今回街の要素の中に想定した仮敷地に布建築空間を配置する。設定した街の要素は五つあり、今回は六つの布空間を一つ一つのストーリーを用いながら設計を行った。また駅の改札口前のみ二つの布建築空間が配置される。

・六つの布建築空間

①駅の改札口前= 『a 休息と距離 』

ここでは自己を一時的に外世界から避難させ、距離を保ちながら休息を取る空間建築。



たまご型の平面に二層の布空間が存在する。 四本の柱で構造と布を支え、柱の間隔の広 い方が入口となる。外世界との内のグラデ ーションを持たせるために一つずつ布を開

いていき、二層目まで自身で広げ空間へと入る。空間内には "休息スペース"と外世界へ出る前の "準備スペース"の二つの空間が存在し、休息スペースのみ空間内に椅子が置かれている。出口に向かうにつれ天井高は少し高くなっていき布も屋根と同様に高さが変化していく。一層目では表情は目視出来ず人の存在は確認できるが、二層目では足元のみの確認が可能。外側の布は中の布を包むように構成され、空間が下に重みを持ちながらもふんわりとしたボリュームが広がる。

②歩道=『b 感情の居場所 』



ここでは街中の刺激から離れ一度立ち止まり、ゆっくりと流れる時の中で自身の感情 と向き合う空間建築。

約 10mの長方形の平面の中に適度な間隔を

空けた円型の布空間が四つ存在する。それぞれにストーリーを設け、外世界との距離を保ちながら体験していき、自身の中にある感情と向き合いながら、感情の経緯に想いを馳せ自己を認めていく。四つの空間ストーリーでは、①自分の中にある感情の観察②それぞれの感情を受け入れる③問題と背景を受け入れる④感情に居場所を与えながら外世界へと向かう準備というテーマを決め順番に体験していき、布と共に自身を受け入れていく。ストーリーが変化するごとに布も変化していき、与える役割も変化していく。出入口や外壁・布建築は異なる布を使用しは、内部の布建築では自身の世界に浸るため「視線の抑制・パーソナルスペースの確保」を強化した透過度が低い素材を使用。

③広場空間= 『 c 思考(感情)との距離 』

ここでは人々が感情として身体に迎えられるものを空間により視覚化し、第三者目線で空間を眺めることで自身の感情との向き合い方を考える空間建築。



約4mもある円型の平面の中に喜怒哀楽の四つの感情に沿った布空間を設ける。空間内に存在する柱は、建築を支える柱となり、感情の中にいる自分と見立てる存在ともなる。出入口の布

を開くと感情空間ごとに異なる入口が待ち構える。 開口部を 覗くと感情に沿った布空間が広がり、現実と一歩離れ映像を 眺めるかのように第三者目線で空間を見つめる。 また自身が 空間を眺める上部は外部と繋がり、 空間に極度に入り込むことを制限する。

①喜→嬉しくて未来に光を感じ胸が高まる感情

三層の布が間隔を空け配置。スリットが入った布は暖簾のように佇みながら、微かな空気でさえ揺れ動く。層ごとにスリットの間隔と全体の高さを変化させ、二層目と三層目にラメ入りオーガンジーを使用している為、層が重なるほど空間に 黄色が溢れ、輝きが広がる。

②怒→怒りの感情が頭の中に居続け自分を保てない感情 異なる二枚の布を重ね、渦巻き状の平面で空間を配置。手前 の布は怒りの感情の際の混雑している頭の中を描く。色彩を 青とピンクの対色の組み合わせの素材とし、奥の布では怒り の中にある闇を黒のオーガンジーで表現。また怒りの感情の 深さと数を表現したスリットを入れ、それらは渦巻き空間の 中で生き続ける。

③哀→周りが見えず暗闇から抜け出せないくらい苦しい感情 七層の異なる布が等間隔で配置。手前からアーチ状の開口部 が少しずつ拡大し、奥に進むにつれ縮小する。どんなに進ん でも光が見えず、孤独に感じ、暗闇に入りながら抜け出せな い様子を空間に落とし込んでいる。自分と見立てた柱は空間 内で彷徨い続けほとんど姿を目視出来ない。

With gentle architecture - Psychological space that embraces HSP characteristics through fabric architecture -

Haruka Aoki

④楽→周りが見えないほど楽しく自分に自信が持てる時間空間内に六つの異なる布がランダムに配置。それぞれ色も透過度も高さも異なり空間に規則性は存在しない。布同士が重なり合わさることで、使用数以上に空間に色が生まれる。楽しさの中にも様々な感情が頭の中で駆け巡るように、空間が多彩な特徴で溢れる。

④歩道橋または広場空間= 『 d 静寂とつながり 』

二つの真逆の空間が隣同士で存在し、静寂の中に他者との繋がりを感じる空間建築。



長方形の平面の中に異なる二種の空間を配置。 一つ目は外世界との距離を強く保ち自身の世 界に浸る空間。二つ目は外世界と緩く繋がり 分断せず孤独とは離れた空間。それらの空間

は透過度が異なり、布の素材と色は変化するが空間の形は同等となる。さらにこれらの二つの空間を包むように外側に膜のような布が空間全体を覆う。二つの空間では中央に一つの長椅子が設けられ、腰を下ろしながら各自空間に浸る。そして中央の椅子とそれぞれの双方の空間を分断している布との隙間空間から、互いの存在を感じ取る。相手の情報は伝わらないが、ただ互いの世界を尊重する隙間空間となる。

⑤大公園=『e 心の柔軟性 』

一つの大きな空間内に様々な布空間を用意し、他者との心地 よい距離感を掴みながら、他者の価値観に寄り添う空間建築。



約 11m の大きな正方形の平面の中に大きく 分けて三つの布空間が存在する。布空間は 中央に位置し、四方の外側には縁側のよう に休息スペースとして街に開く。適度な間

隔を空けた柱が建物全体を支えると同時に、人と人との距離を適度な間隔にする役目を担う。縁側スペースを抜けると布の層が待ち受ける。素材と高さが進むごとに変化し、1m間隔で設けられたスリットをかき分けて進む。すると次は $1m \times 1m$ の最大 12 個最小キューブ布空間が姿を現し、その先には $2m \times 2m$ の空間があり天窓を通し光が降り注ぐ。これらは可動布により自身で空間の仕切りを変化させ、他者との繋がりを残しながら個々の時間を過ごしていく。

⑥駅の改札口前= 『 e 自己と優しさ 』

不特定多数の人が行き交う混在の空間で自身の身体を包む。 外世界との距離を保ち、心身ともに休息を取りながら自身に 優しさを向ける空間建築。



A 同様に外環境と一定の距離を保ちながらも 異なる布や空間構成とし、空間内に二つの空 間が存在する。布は全体で三層構成となり、 外壁の布と布建築空間の二層で成り立ってい

る。入口に向かうと一度に三層を開き、kind space へと足を進める。ここでは計六枚重ねの布が身体を包み、柔らかいオーガンジーが重なることで空間内でも柔らかい壁と変化し、時

折触れることにより心地良さを感じる。空間内は光が満ちているように輝きを与えながらも自己を伝える情報は漏れることはなく、自己に優しさを向けられるように自身を労わる時が生まれる。そして一つ目の空間を抜けると、relax space が待ち受けている。柔らかく外世界と仕切られた空間には一つの椅子と植栽が姿を見せる。二つの間の上部からは光が入り、腰を下ろし身を任せながら時を過ごす。

A と同様に進むごとに天井高は高くなり外部へと開いていく。 一番外側の布は人の存在を確認できる透過度であり、kind space では足元のみの確認が可能となる。そして布の高さが 外側よりも少し低くなる。

5. 最後に

HSP 特性を持っていることは決して短所ではなく、人に寄り 添い合う力や物事を深く感じ真摯に向き合うことが出来る、 温かい長所に溢れている。だからこそ本来の自分が街中でも 過ごせるようにこの布建築は守る役割をしてくれる。決して その場限りではなく、これからも自分らしく生きていくため にそっと寄り添う存在となる。現代では自身の目で確かめて いない不透明な情報に振り回され、自身の本音が見えなくな ったり、他者を攻撃し合うことが日常となっているが、今一 度自身の心に目を向けてほしい。今回は人々が過ごす街中に HSP 特性に焦点を当てた心理的空間を設計したが、逆を見れ ば全ての人が自身に目を向け優しさを向けてほしいことが最 大のメッセージとなる設計案である。街中にそっと現れる布 建築は時折自由で、柔らかさと共に優しさに溢れ、人々を繋 げてくれる。建築は本来人々の優しさの過程が集合した結晶 だと考え、その事実を思い出す建築を設計したいと思ったこ とから生まれた設計であり、自身もこれから優しい建築とと もに生きていきたいという意思表示でもある。

布建築が誰かのために生き街の中にずっと優しさをもたらしてくれる、そんな存在であってほしいと願う。

「出典

A 溝部宏二「それって本当に HSP?」精神科医が観た HSP 概念普及の功罪 (2023 年 03 月)p. 13-16

B武田友紀(2018)「繊細さん」の本 p. 74-81

「参考文献

- ・上野雄己.高橋亜希.小塩真司「Highly Sensitive Person は主観的幸福 度が低いのか?―感覚的処理感受性と人生に対する満足度、自尊感情との 関連から一」(2020年)p104-105
- ・高橋亜希「Highly Sensitive Person Scale 日本版(HSPS-J19)の作成」 (2016年)p.68-69
- ・峯岸佳「HSP 特性と自尊感情が過剰適応に与える影響について-生きづらさの考察-」
- ・イルセ・サン(2016)鈍感な世界に生きる敏感な人たち
- ・クリストフアンドレ著/坂田雪子訳(2015)「初めてのマインドフルネス -26 枚の名画に学ぶ幸せに生きる方法-」

京都美術工芸大学院 建築学研究科 建築学専攻 2 年

*Kyoto Arts and Crafts University Graduate School Applied Art , Department of Architecture

既存ストックとしての廃校の有効活用について ~元京都市立陶化小学校を対象として~

M22002 河北篤人

廃校ストック建築コンバージョン地域活性化防災拠点番組制度

1.研究の背景と目的

近年、少子高齢化に伴う学校の統廃合により全国各地 で廃校が増加している。学校建築は 利便性の高い場所に 立地している事が多く、廃校になった後もそれぞれの地 域のニーズに合致した用途へと有効活用していくことが 望まれるが、用途が決まっていない事や、財政状況が厳 しいことから、廃校が放置されたままとなっていること が多い。廃校は本来ストック建築であり、有効活用を求 められるが、システムの効率上合理性という観点から、 ストック建築とならないことが望ましいと考える。また 廃校には多大なる資金 が投与されているのみならず、活 用されていない状態でも維持管理のためにコストがかか る。そのため可能な限り迅速かつ有効に活用、転用され ることが求められる。本研究では、ストックとしての有 効な活用方法を再構築していくと共に、廃校を利用し続 けることは地域のコミュニティの場が在続し、地域活性 化の糸口となることを目的とする。

2 全国での廃校活用の現状

全国的な少子化による児童数の減少や都市化、児童数 の偏在が増えている。児童の減少 により、教育環境が悪 化することで過疎化の地域では廃校するケースが一般市 区町村より多く発生している。さらに過疎地域自立促進 特別措置案により、公立学校の統廃合に伴う費用を負担 することを認めており、統廃合が進められやすい経済状 況になっている。また、高度経済成長期に合わせて多く 建設された公共建築は設備の不備、建物の耐震性が低く 安全性が低下しており、建物の老朽化問題が課題となり 建て替えが必要になる。しかし現在の経済では公共建築 を建て替えする費用を負担することが難しい場合が多く、 過疎地域自立促進特別措置案も相まって廃校という結果 になりやすい環境である。そのため現在でも廃校になる 学校建築は多くあり、平成14年から令和2年の全国の廃 校数では 19 年間で全国合計約 8580 校もの公立学校が廃 校となっている。1年間に平均すると毎年約 450 校の公 立学校が廃校となっており、平成 24 年では最も多く廃校 となった数がピークとなり、そこからは減少傾向となっ ているが決して少ない数ではない。

平成 14 年から令和 2 年の全国の廃校では廃校になり建物が現存しているものは 8 割を超えており、廃校になってか

らほとんど建物が残されている。その中でも有効に活用されている廃校数は約7割で高い割合である。しかし、 平成24年に最も多く廃校となった数がピークとなり、そこからは廃校数は減少傾向にあるが反対に活用の用途が決まらない廃校の数は年々増加傾向にあり、平成24年から減少傾向にある廃校の数との関係性に相反している。そのため、現在の廃校の活用については建物の保存のほかに、活用内容に注意を払う必要性が求められる。

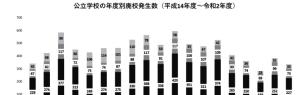


図1. 平成14年~令和2年の廃校発生数

平成14年度~令和2年度廃校利用調査					
廃校の数	小学校 中学校	8580≉⁄2	5678校 1721校		
発化の数	高等学校	85804%	1181校		
施設が現存し	している廃校の数	7398校	86.2%		
活用され	hているもの	5481校	74.1%		
活用され	ていないもの	1917校	25.9%		
活用の用途	決まっている	278校	3.8%		
活用の用速	決まっていない	1424校	19.2%		
取り壊しを予定		215校	2.9%		
現存する施設なし 1182校 13.89					

図2. 平成14年~令和2年の廃校利用の詳細

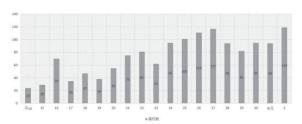


図3. 平成14年~令和2年の廃校の非活用数

Regarding the effective use of closed schools as existing stock \sim Targeting the former Kyoto City Toka Elementary School \sim

Atsuto Kawakita

3番組制度

京都市では町内会の自治連合組織を「番組」と呼ぶ。 明治維新後に京都府では都市の衰退を問題視とし、改善 策として子供たちの教育に力を注ぐことになった。その 具体例として 1 番組に 1 校、小学校を開設するという案が 出された。しかし当時の京都は財政難が著しかったため、 それらの小学校の多くが創立から運営まで番組の地域住 民などが資金の援助で賄われた。そのため番組は学校単位での位置づけを得ると同時に、地域に根強い自治連合 組織が生まれた。そのため当時学区単位で行政の機能も 担うことがあった。これらのことから現在でも多くの小 学校で運営の形態の歴史を継承し小学校に対する支援活動や、小学校が住民の地域活動となり、住民と小学校の 間では深い絆を持つこととなる。双方の連携を通して地域の核として機能する番組制度は、他の都道府県にはなく、京都府の特徴的な歴史である。

4 選定敷地

選定敷地の元京都市立陶化小学校は平成 24 年に凌風学園との統合により閉校となった。しかし、その跡地活用については未だに提案が無く現在も活用されず、システム上合理的では無い。しかし、活用されない期間を短縮するには建物の規模や近隣地域の特徴など様々な要因があり、提案内容によっては調整が難しく現実的では無いと考える。活用されていない期間を短縮するだけにはなく、活用方法が決まるまでの間、時限的な仮設建築として利用することが有効ではないかと仮定する。仮設建築は今後その地域がどのように変わっているか予測し、活用方法が決まった際に迅速に対応できるものでなければならないと考える。廃校になった結果寂しい施設ではなく、それを機に新たな地域の場として生まれ変わる必要がある。



図 4. 元京都市立陶化小学校航空写真

5 陶化学区アンケート調査

5-1 アンケート調査内容

小学校に対する想いが根強い地域住民の意見や知識を取り入れるためアンケート調査を行った。それにより地域住民の意見を中心とした建物のコンバージョンの計画を図った。対象として陶化学区のエリアで一軒家のみを対象として 270 件の配布を行った。 回答数として 41件の回答があり、回答率は 15%という結果になった。アンケートの内容として、「1 年齢・2 陶化学区での居住年数 3 身内での卒業生の有無・4 跡地活用についての関心の有無・5 跡地活用に伴う校舎の保存について・6 学区内での公共サービスの満足度・7 跡地活用についての提案内容・8 (7) の提案を通じてどのような街を願うか・9 跡地活用された場合の運営形態・10 跡地 活用に関する住民参加型の機会に対する意欲の有無・11 自由記述の意見」と選択形式のほかに自由記述と、計 11 項目の質問とした。

5-2 アンケート調査結果

回答者の年齢の幅は 10 代~ 80 代と幅広い年齢層で、 60 代の回答数が最も多い結果となった。また身内に陶化 小学校の卒業生が いる人は、全体の約7割だった。陶 化学区の地域住民は近くにスーパーがなく買い物ができ ないことや、公共施設が少なく子育て がしにくいなど、 9 割以上の人が陶化学区はサービスが充実した街ではな いと回答していた。その中で災害時の避難場所が不自由 分 だという意見は早急に解決しなければならない問題だ。 地域住民が思い描く跡地活用の提案として多くあった内 容は、跡地を開放 して気軽に地域住民が利用できる施設 を望むことだ。公園やワークショップなど多種多様な活 用案があった。また地域の特徴的な 文化として、マダン の活動を残していくことが可能な施設を望む意見あり、 提案内容のほとんどが地域住民の利用を主体とした 意見 だ。施設の運営方法に関しては 6 割の意見が、民間がか かわり運営する意見だ。アンケートの意見をまとめた結 果、地域住民 は現在の陶化小学校の活用について満足し ている人は少ない。しかし個々で活用方法に思い描くも のがあり、活用方法の話し合いの 場があれば 8 割以上 の人たちが参加したいと回答しており、住民の陶化小学 校に対する関心が高いことが分かった。



図 5.アンケート調査結果グラフ

京都美術工芸大学大学院 建築学研究科

Kyoto Arts and Crafts University Graduate School of Architecture

6 元陶化小学校の防災

元陶化小学校は現在、地域の防災拠点として設定されている。対象とされている災害は、洪水、地震、火事内水だ。まず地震に対しての災害を想定した場合、本館と北校舎は耐震性能がなく使用することができない。そのため避難場所は体育館である。自身に対しての問題点として避難者の想定人数は300人であるが、体育館の収容可能人数が300人を満たしていないことだ。

次に洪水などの水害を想定した場合、体育館は避難場所としての役割を果たすことができない。ハザードマップでは陶化小学校は浸水高さとして1.4mが想定される。しかし体育館のGLからの床の高さは60cmと、想定浸水高さに満たしていない。また、水害を想定していることから、災害時に使用する防災グッズの備蓄庫は校舎の2階部分に設けられている。そのため、災害時に備蓄庫から防災グッズを移動させることが困難ではないかという声が挙がっていた。これら様々な問題点があることから、現在陶化学区の自治連合会を中心に避難訓練や、防災シミュレーションなどが行っている。それでも防災拠点としての不満や不安が多く残っているのが現状であるため、本研究では災害を想定し、防災拠点としての役割を果たす必要が求められる。



図 6. 旧陶化小学校「配置図兼1階平面図」

7 防災的計画

学校施設などは、災害時には地域の避難所としての役割を担うため、災害時以外にも十分な安全性と機能性を求められる。しかし現在の陶化小学校は耐震補強が施されていないことや、想定されている災害に対して十分な機能を果たすことが出来ないと予測されている。特に防災の拠点として中心になる体育館は十分な機能を持たないと予測されているため早急に対処が必要だと考えた。体育館の用途として防災拠点、イベント施設、運動施設など周辺地域に将来大きな変化があった場合でもこれらの用途が基本となり、中心となる事が予測されることや、現状の体育館の構造、予測される災害などを考慮し不十分だと判断し、現在の体育館は取り壊し、新しく防災拠点として機能するように新築として改修することが望ま

しい結果となった。計画内容として第一に考慮したこと は防災拠点としての機能を保ち向上する事が出来ると共 に、地域のイ ベント行事にも対応出来ることが求められ る。実際に災害が起きた際には、主な防災拠点として、 被災者が一時的避難場所 として利用される体育館と、災 害に伴う火災などの二次災害から、安全を確保するため のグラウンドの 2 つがあり、グラウ ンドはその他災害 時物資の供給や、野営などの仮設的な空間として機能す ることが予測されるため各自連携をとる必要がある。こ れら問題の他に大きな問題として挙げられることは床高 の問題だ。陶化小学校の敷地は予測されている浸水高さ が 1.4m あるのに対し、現在の体育館の床高は 60cm と 想定高さに満たしておらず防災拠点として機能しないこ とが予測される。 そのため計画内容として体育館の床高 を GL から+1.5 メートルとした。また床高を上げる際 体育館の前面を屋外テラスとし、緩やかに床高を上げる ことでグラウンドと連携を撮ることが可能になる。 また 災害時必要となる物資の備蓄庫を隣接させる事で、災害 時の物資の運搬が容易くなり、機能面として効率化を図 ることが できる。前面の屋外テラスを中心に防災面、イ ベント行事の際に必要となる機能とグラウンドの連携を 解消することが出来、 防災拠点として機能を向上させる だけでなく各用途に対して効率化かつ、合理性を得るこ とが出来る



図 7.計画後「体育館パース」

8 全体計画

地域住民と商業施設がそれぞれお互いに確立した用途を 持ちつつもお互い に干渉し調和するというものだ。それ ぞれの用途として、北館と本館は全てを取り壊さず一部 を減築、改装し耐震補強を加えたコンバージョンとし、 商業施設として活用する計画だ。また、南館、体育館は 耐震面などの防災活動としての拠点として問題が多数 られた為全てを取り壊し、新たに新築として建設する。 全体の計画として、まず敷地の閉鎖的空間を解消し、開 放的な空間となるようにした。現在、敷地へのアプローチ は九条通りに面した北門と東側の路地に面した東門の 二方向のみで、さらに外周を囲うように建物が配置され ているため閉鎖的な空間となっている。これらを踏まえ 敷地へのアプローチを増やす計画として元々防災拠点と

Regarding the effective use of closed schools as existing stock \sim Targeting the former Kyoto City Toka Elementary School \sim

Atsuto Kawakita

して不十分な体育館の配置を見直した。体育館の配置をプールがあった西側に配置することで、敷地の東側に広大なスペースができ、同時に塀を撤去することで外部からよりオープンな空間となる。外部から人々が自然とアプローチ出来るようにするため、グラウンドを囲うように遊歩道を設けた。 これら遊歩道は施設に用事がない人でも通り抜けとして利用出来る事や、 回遊性を持たせている為地域住民が散歩など運動の目的として利用することも可能だ。周辺地域に公園がなく、憩いの場が少ない為、地域に 開放的な空間とする事で地域住民が気軽に活用することが出来ることで、 新たな憩い場として有効活用することが可能である。



図8.計画後「全体上空パース」

9 商業施設の計画

廃校には多大なる資金 が投与されているのみならず、 活用されていない状態でも維持管理のためにコストがか かる。そのため可能な限り迅速かつ有効に活用、転用さ れることが求められる。しかし財政難や用途が決まらな い事など様々な問題が重なり有効活用される事が難しい 場合もある。特に陶化小学校は廃校になってから現在も 活用されておらず、京都市のみならず地域住民も跡地活 用に関して強い関心を持っているの にも関わらずその期 間はかなり長期間を有している。これら原因の 1 つの要 素として、跡地活用の条件が難題であると推測される。 1 跡地活用の際には土地を売却ではなく 貸出とする。2 地域住民が活用、活動できる拠点を設ける。3 貸し出し の期間として 60 年間活用することが可能であるか。こ れら条件があるため活用案として地域の将来を考え柔軟 に対応出来る用途が求められる。商業施設の計画は新た に建物を作り替えるのではなく北館と本館を活かしリノ ベーションとした。特定の用途として設計するのではな く、テナントとして 場所を供給することで入れ代わり立 ち代わりその都度内容が変わるため、時代によって求め られる用途に対して柔軟に対応することが可能になる。 またこれら計画は 仮説的なものとする事で、コストが削 減され、将来特定の用途が必要な際には容易に 建て替え ることが可能になる。その為コストがかかり続けるスト ック建築でも、ストック建築のまま活用することが出来 合理的だと考える



図9.計画後「商業施設パース」

参考文献

- 1) 能勢 温『京都市における廃校小学校跡地利用計画策定プロセスに関する研究』日本建築学会計画系論文集第73巻第626号,913-918,2008年4月
- 2) 古賀 楓子 橋本 征二 『京都市都心部における小学 校跡地活用に関する研究』第 7 回日本 LCA 学会研究 発表会講演要旨集 2012 年 3 月
- 3) 藤野 哲生・藍澤 宏・菅原 麻衣子『公立小学校廃校 の要因とその課題に関する研究』日本建築学会計画系 論文集 第75巻 第649号, 579-585, 2010年3月
- 4) 権 安理『廃校の社会理論 なぜ廃校は活用を求められるのか』応用社会学研究 2012 No. 54 161
- 5) 京都市基本計画審議会『はばたけ未来へ! 京プラン (京都市基本計画) 案』平成22年11月
- 6) 石川 久仁子『複合的不利地域におけるコミュニティ 実践に関する研究』京都・東九条を中心に 関西学 院大学審査博士学位申請論文 2013 年 3 月
- 7) 一般財団法人地方自治研究機構『市区町村における廃 校施設の有効活用に関する調査研究』平成 27 年 3 月
- 8) 文部科学省 報道発表『令和3年度 公立小中学校等 における 廃校施設及び余裕教室の活用状況について』 (https://www.mext.go.jp/content/20220331-mxt_sisetujo-000012748 1.pdf)
- 9) 文部科学省, 2003a,『廃校リニューアル 50』 (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401 /frame-1.htm)
- 10) 文部科学省 『廃校施設の実態及び有効活用 状況等調査研究報告書』

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401 /houkoku fm1.htm)

図版出典

図 1. 図 2.図 3

文部科学省 報道発表『令和3年度 公立小中学校等に おける 廃校施設及び余裕教室の活用状況について』か ら作成

図4 Google Earth より

図 5.図 6.図 7.図 8.図 9 著者作成

京都美術工芸大学大学院 建築学研究科

Kyoto Arts and Crafts University Graduate School of Architecture

東北における巨大防潮堤を活用した 復興提案

―隔絶する巨壁からしなやかな風景へと―

Reconstruction proposal using huge seawalls in Tohoku

-From a rejecting giant wall to a supple landscape-

M22004 夏山 貴光 * 指導教員 種村 俊昭 **

- * 京都美術工芸大学大学院 修士課程
- ** 京都美術工芸大学建築学部建築学科 特任教授·工博(設計指導)
- M22004 Takamitsu Natsuyama * Academic advisor Toshiaki Tanemura **
- * Graduate School of Appliced, Kyoto University of Arts and Crafts Univ.
- ** Specially Appointed Prof, Kyoto Arts and Crafts Univ, Dr. Eng. (Adviser)

キーワード:防潮堤・インフラ・スケルトン - 居場所・地域活性化 - 選択性・持続性 - 仕組みづくり・インフィル - 風景 1 研究-提案の背景

東日本大震災から10年以上の時間が経ち、多くの人々は復興により日常の暮らしを取り戻しつつある。だが東北の海辺の町々には、一部の地域を除き大半が大地と海とを視覚的に隔てることとなった巨大な**防潮堤**が完成した。町の人々によっては巨大防潮堤の建設に不満の声も多くあり、私もいくつかの疑問が湧いた。「防潮堤はこんなに大きくする必要があったのか?」「不満の声があるのになぜ建てられたのか?」「この防潮堤のせいで、地域の活性化が妨げられるのではないか?」等々。

住民にとって主な生活・生業の場である大地に接する海は、震災時には忌まわしき災害を起こす危険な存在であるが、日常的には生業の場であり、遊び場であり、地域の風景に必要な存在である。防潮堤を市街地から眺める住民の映像を見て、私にはすべてを遮る巨壁に感じていくのではないか、だれも近づかない寂れた場所となってしまうのではないかと、思ってしまう。そこで、隔絶する巨壁のような存在の防潮堤をどうすれば、人気(ひとけ)のない寂れた景色にせず、自然と人々が織りなす生き(域・息・行き)づかいを感じる風景にすることができるのかを考え、その風景の実現を目的とし防潮堤にランドスケープを構想する事を提案する。

2. 研究-提案の目的

災害時に人命を守るインフラストラクチャーとして東北三県に今回建設された防潮堤(図1中央欄)。そして、今回の計画を提案する上で大事な事の1つが「その防潮堤は既に建設されている」と言う事実だと考えている。つまり防潮堤の改案と言っても、防潮堤自体を削ったり破壊したりすることは困難だと考えた。そこで自然災害時、特に津波に対する対応を常に認識する場所ともなり、地域の中の人々が通い、集う場ー居場所の一つとなるように、建築、造園、アート等を加えて、人と自然の息づかいを感じるしなやかな風景が展開するようなランドスケープデザインを構想する。具体的には、防潮堤と生活、生業空間との特性に応じて選定した3地域(図1右欄)の地域資源(風土、地形、歴史、地産、生活、等)を活用し、スケルトンと捉えた拒絶的な防潮堤に、選択性・持続性(可変性、増減性、移動性)のある多様なインフィル(建築、造園、アート等)の研究を行い、復興後の地域活性化の「仕組み」づくりにつながるよう改善案を提案する。

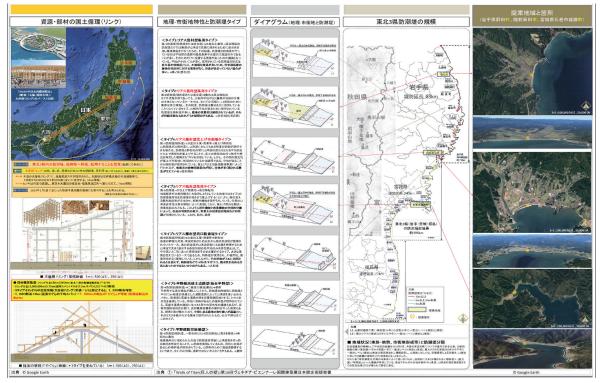


図 1 資源・部材の国土循環 - 東北三県の防潮堤の状況とタイプ (形状と地域特性との関係) - 提案地域と箇所

3. 地域活性化の「仕組み」づくり

長大な防潮堤を大地と海の接線「縁側」と捉え、復興後の防災まちづくり、地域活性化のための持続的な「仕組み」づくりを構想するために、防潮堤改善例や一般的な地域活性化の事例を参考に、地域特性、地域資源、地域課題、取組み内容等の地域特性に応じた多様な選択肢のある持続的(段階的)な防潮堤の改善メニューを作成し、提案の根拠・裏付けとした(図2)。

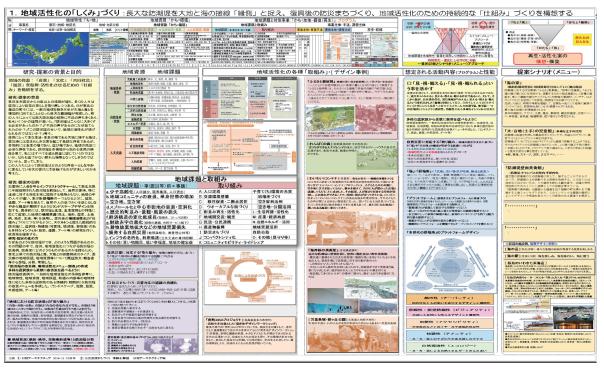


図 2 地域活性化の「仕組み」づくりのメニュー

図3は防潮堤の地域タイプ、断面形状、提案・デザインに対しての考え方をメニュー化したもので、

ダイアグラムの内容は「人々が防潮堤を大地と海を隔てるモノではなく、大地と海とを繋ぐ縁側のような存在に捉えることで、人々の一義的な目線が多義的なものへと変化していく」と言う考えを示したものである。



図3 防潮堤 改善案のメニュー

- 4.1 「アド・ジョイン」架構: 「貫(ぬき)構法」で 「やぐら」(二次スケルトン) を防潮堤の上に、離隔をとって、「(仕)組む」
- · 増減築、組み換え、移築、再利用が出来、選択性、 持続性、可変性、可動性、交換性、転用性がある構法の検討結果。
- ・「貫構法」は、日本で古くから社寺建築(例:清水寺の舞台)などに使われてきた優れた伝統構法である。
- ・「貫構法」は、「大阪・関西万博の大屋根 (リング)」でも採用されている。
- ・ スケルトンとしての防潮堤に対して、構造的に分離するために、離隔をとることで、必然的に「**活動空間**」が生まれる。 (「防潮堤」と「やぐら」との間に免震・制振のしかけの導入も考えられる)
- ・ 防潮堤の「地」としての「**地温**」を、そして、**太陽熱集熱体**として活用し、その空き空間に**重力換気**システムを「仕組む」。
- 4.2 「ユニット建築」のインフィル:小屋的なサイズ (複数サイズ) の建物を必要に応じて「やぐら」(二次スケルトン) にインフィル・「仕組む」
- ・コンテナサイズのユニット化により、車、鉄道にて移動可能となり、敷地内、地域内、広域内での可動性を確保する。
- ·「やぐら」(二次スケルトン) への抜き差しが出来、増減築、可変性、交換性が可能である。
- ・「やぐら」(二次スケルトン) にインフィルされた「床」と共に「縁側」空間を形成する。
- 4.2 「ユニット建築」の分散配置・連結配置:多様な活動の場「縁側」空間の形成
- ・それぞれの「ユニット建築」には必要最低限の機能を組込み、共用空間は**半外部(「縁側」空間)、外部空間**で満たすことにより 柔軟に**様々な活動の「場」**が他の人から**見える形で展開**できる。
- ・キッチンカー、コンテナハウス、屋台などとの組み合わせにより、より様々な「場」が常時あるいは**催事**に形成できる。

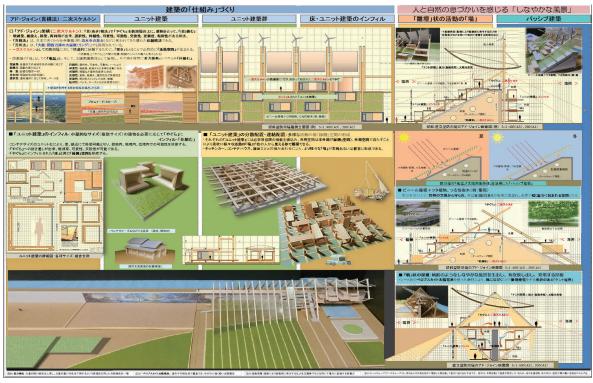


図4 建築の「仕組み」づくり

- 5. ケーススタディー提案選定地域: 岩手県野田村、岩手県陸前高田市、宮城県石巻市雄勝町
- 5.1 岩手県野田村:リアス農村型集落タイプ、傾斜-直立型防潮堤(図1) 村のマスタープランから導き出した提案 岩手県野田村では『-津波防災対策と魅力・活力創出に向けて-』という計画案を出しており、東日本大震災の大津波からの復旧・復興に向け、平成23年11月7日に基本理念を「安全・安心で活力あるむらづくり」と定め、「野田村東日本大震災津波復興計画」(図5)を策定し、災害復旧事業、復興基金事業、復興交付金事業などを進めているが、この復興計画の計画範囲には防潮堤近辺は入っていない。海からかなり離れた場所に「海を感じる都市公園」(図5)は構想されている。

そこで、その「海を感じる都市公園」の延長線上の防潮堤に**多世代交流-防災村づくり拠点「海の家」**を提案する。

- 5.2 岩手県陸前高田市:リアス都市型嵩上げ市街地タイプ、傾斜型防潮堤(図1)一大人向けのメモリアル施設に対して児童向け施設を提案
- 5.3 宮城県石巻市雄勝町:リアス観光型集落タイプ、直立型防潮堤(図 1)―防潮堤をキャンバスとして絵画を描き続けている。その付随施設 として提案



図5 岩手県野田村の地域情報、マスタープラン、中域計画

ケーススタディ_1:岩手県野田村

「海の家」: 傾斜防潮堤壁面に地域資源を付加していく拠点施設 防潮堤に対する付加要素 (「ふるさと風景画」、「四季の花植栽」、 「子ども達の遊び場」など)を作成する、活動するための拠点

施設として各種の施設を、防潮堤の形状に合わせて「やぐら」を構築し、様々サイズ、用途の「ユニット建築」を「組入れ、組替え、組込む」可変性、持続性のある場づくりとする。完成した絵は、時間や季節を超越して、百聞を一見にした地域の資源のパノラマであり、**災害時の身についた避難マップにもなる**。夏の海水浴場の利便施設ともなる具体的施設は、アトリエ、



■「防潮堤壁面美術館」

ケーススタディ_3:宮城県石巻市雄勝町

「防潮堤壁面美術館」: 防潮堤-キャンバスを屋内-半屋内化 直立型の防潮堤のため防潮堤に対して、接することができるス ロープ、防潮堤の上を移動できる床等を計画する。この近くに は住宅などは少ないため、この場所を訪れる観光客や、近隣の 市町村住民のためのイベント空間としての役割を考えている。

「海岸線の美術館」は壁画から壁画を巡り雄勝の町を隅々まで 堪能すると言うコンセプトがあり、このインフィルは壁画の場 所によってデザインや用途を変えていく可変性のある場造りを 想定している。



■「海の家」



■「大・台地(土手)の児童館」

ケーススタディ_2:岩手県陸前高田市

「大・台地の児童館」: 防潮堤の斜面を活用したみえる児童 施設」

防潮堤に斜面を利用した簡易的ボルダリングや、木組みのブランコ、端材でつくるジャングルジム等を作成する。 防潮堤は「いわて TUNAMI メモリアル」から直線で移動することができる。そのたメモリアルから防潮堤に向かうにつれ、この場で遊ぶ子供の賑わいを感じることができ、メモリアルで見た過去から、にぎわう未来(子供達)へと視点が変わる事を想定している。

参考文献 : 論文 : 報告書等

第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館企画提案書 Walls of Titan(巨人の壁) 阿部仁史チーム

特集15 復興の10年—日本建築学会・土木学会 協同編集 建築雑誌 2021 年3月号 年表中の「復興まちづくり断面イメージ」

新聞記事に見る防潮堤問題の論点整理—岩手日報 2011 年 3 月から 2014 年 3 月の記事を手がかりとして — 坂口奈央

津波被災地における防潮堤整備事業と防災まちづくり事業の相互関係の分析~東日本大震災による岩手県沿岸の全被災地を対象に~ 樫原 悠 家田 仁

津波減災のための粘り強い海岸堤防の提案と避難施設周辺の津波挙動の評

蔭による道のなかのスローな場

M22005 古川柊平 指導教員 井上晋

- 京都美術工芸大学大学院 建築学科
- 京都美術工芸大学 教授・工博(設計指導)

A slow place on the road using shadows

FURUKAWA Shuhei* INOUE Shinichi**

- Department of Architecture, Faculty of Arts, Kyoto Arts and Crafts Univ.
- ** Prof. Graduate School of Applied Art., Kyoto Arts and Crafts Univ., Dr.Eng.(* Adviser)



1 ファスト&スロー^{注1}

産業革命以降、何よりも速さを重視したファスト重視の時代が続いている。ICT などの発達で欲しいものがすぐに手に入るこ とや、調べたいものがすぐにわかるなど、利便性が向上している。また、AIの発達などでより一層効率化が図られている。コ ロナ禍以降では、リモートワークを利用することにより移動時間の短縮や好きな場所で働くことができるようになった。その ようなファスト重視の社会の中でスローな生活を求める人も多い。しかし、都心部の公共空間でスローな場を過ごすことがで きる場は少ない。そこで、都市部の公共空間において、スローな時間を感じられる場所を作ることが必要である。

1-1 日本の道空間

日本の道空間は、移動すること以外に、自然発生的に広場のような場が形成されていた。そのため、日本の道空間は広場的な 役割もになっていたことがわかる。目的のために移動するというファスト的な役割と 自然発生的に広場が形成されるスロー的な役割の2つが共存していたととらえること _

ができる。

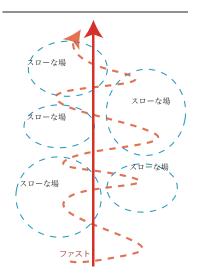
1-2 社会活動と任意活動

ファストとスローが共存する場を考える際に、「ヤンゲールの『屋外空間の生活とデ ザイン』^{注2}から、必要活動と任意活動を参考にした。必要活動とは「仕事に行く」「学 校にいく」、仕事をする学業に励むなどの目的のための行動であり、任意活動とは、時 間の許す限り「休む」「遊ぶ」などの行動である。日常を過ごす中で、必要活動の中で も隙間時間などの任意活動は必ず発生する。つまり、必要活動の中にも任意活動と呼 べる時間帯が存在している。このような隙間時間に焦点を当て、観光客が多く人が密 集している京都市内に、一息つけるスローな場が必要だと考えられる。(図1)

2 蔭空間

2-1 影の効用

隙間時間や待ち時間を有意義に過ごすために、一息つける空間が必要である。日常の 中で、隙間時間に落ち着く、他者から離れられる落ち着いた空間があると有意義に過 図1 ファスト&スローによる道空間 ごせるのではないだろうか。そのような場所として、かげの場所となっている空間に におけるスローな場の挿入 注目した。暗い場所は、人を落ち着かせる効用がある。そのため屋外で隙間時間に一



息つける場を形成するための仕掛けとして、かげは有効である。暗い空間の心理的効果には、かけの中での心理状況精神安定性、活動性があり^{注3}、屋外での暗い場所としてかげとなっている場所の人の心理状況を逃避効果、精神安定効果、親密効果に大別して考察した。(図2)これらの心理的な状況に適したかげによる居場所をつくることで、一息つける場を形成できるのではないかと考えた。

2-2 蔭空間の考察

公共の道の中にスローな場を設定し、心理的な効用に対応した蔭空間を構成していく。かげには、影、陰、蔭、翳^{注4}の4種類が存在し、空間として認識されうるものとして蔭に着目し考察した。蔭は陰と同等の意味を持つが、「草木のかげ」「日かげ」を表し、屋外における人が入り込むかげの空間ととらえることができる。(画像1)交差する2つ以上の面をおいた時に出現する気積であり、この立体的な気積を蔭空間と定義する。蔭空間は、影と



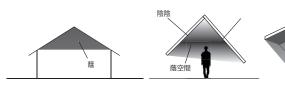
図2 かげの効用

陰の組み合わせにより2つのパターンが存在する。(図3)1つは、多角的な面によりできる2つ以上の陰によって囲まれた蔭空間である。もう1つは、陰と影で構成される。1の蔭空間は、外部から見た時に認識される空間である。2の蔭空間は、蔭空間の内部で体験できる空間である。これら外部と内部で認識の異なる2つの蔭空間を活用しスローな場を構成していく。

蔭空間



画像 1 屋外における蔭空間



1・陰+陰による蔭空間
 図3 蔭空間の定義



2・陰+影による蔭空間

3 目的

目的を持って行動する公共の道空間のなかで、隙間時間である 駅前で待つという行動に焦点をあて、ファストな日常の中にも スローなリラックスできる空間を設けることを目的とし、蔭に よるスローな場を提案する。

4 設計提案

4-1 敷地計画

現在の京都市都心部で、京都市民と観光客が混在し、通過交通の多い場所として、京阪電車の三条駅付近を選定した。三条駅は、京阪電車、地下鉄東西線、バス停があり、通過交通が多く、京都の繁華街である河原町通り、木屋町通りにつながる場所である。また、オフィスが多く点在する御池通りに近い場所であることから、通勤に利用する人も多い。つまり、三条駅は観光客や市民の交通手段でありながら、通勤のために利用する駅でもあることがわかる。このような、三条駅付近の、三条大橋北側川端通りの歩道を選定した。この敷地は、三条通りと御池通りを繋ぐ川端通り沿いの道であり、オフィスの点在する御池通りに通勤経路となっている。また、三条駅から繁華街への経路でもなく、東山通りへの経路でもないため、駅を利用するためだけの歩道となっている。そのため、三条駅付近の中でも人通りが少ないことから、移動中における一息つくための滞留空間として利用できると考え、選定した。(画像2)

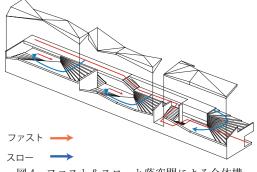
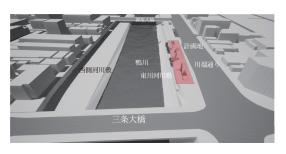


図4 ファスト&スローと蔭空間による全体構



画像 2 三条大橋上空からの俯瞰図

所在地:京都府京都市左京区法林寺門前町 〒606-8387

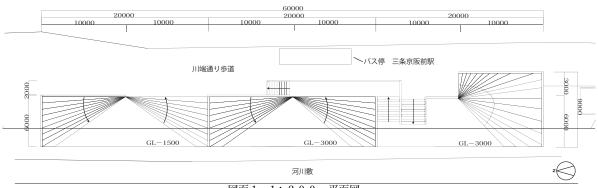
主な用途: 歩道 敷地面積:540m² 建築面積:540m² 延床面積:572m²

キーワード:ファスト&スロー・道・・蔭空間・影・陰

Location: Horinji Monzencho, Sakyo Ward, Kyoto City, Kyoto Prefecture 606-8387

Main Use: sidewalk Site Area: 540m² Building Floor Area: 540m² Total Floor Area: 572m²

Keywords: fast & slow, road shadow space, Shadow



図面 1 1:200 平面図

4-2 設計方法

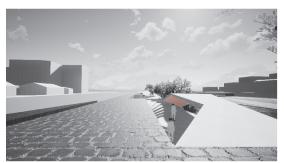
ファスト&スローをコンセプトに、道空間の全体を構成した。次にスローな場で一息つける空間とするために、心理効果のあるかげをスローな場に装置として挿入することを考えた。そこでは、かげを利用したスローな場への誘引的な仕掛け及び、かげによる場の構成を試みた。(図4)

4-3 蔭空間へのアプローチ

スローな場までのアプローチ方法として、外部から見た蔭空間を検討した。外部から見た蔭空間は、交わる複数の陰で構成される蔭により認識されるものであり、陰+陰により構成される。屋内では勾配屋根の天井付近に見られるもので、空間の奥行きや広さを強調している。この陰+陰による蔭空間の導入手法を分析するため新建築データより蔭にまつわるキーワードで1994 年~2024 年を条件とし検索した。分析過程で、蔭空間の一部が認識されることで隠れている全体像を想起させているとが判断した。そのような事例を 216 件中 56 件を抽出した。 34 件 「窪みによる断面的な広がりの想起」 34 件 「窪みによる断面的な広がりの想起」 34 件 「窪みによる断面的な広がりの想起」 34 件 「 34 による下面的な皮行きの想起」 34 件 「 34 による下面的な広がりの想起」 34 件 「 34 による下面的な皮行きの想起」 34 件 「 34 により 34 件 「 34 作 34 件 「 34 作 34 件 「 34 作 34 作



画像 3 敷地南側から見た蔭空間の想起



画像 4 敷地北側から見た蔭空間の想起

4-4 蔭空間による場の構成

スローな場を構成する際、人が入り込める居場所として影+陰による蔭空間を活用する。陰+陰による蔭空間は、閉ざされた空間となり公共空間として不向きである。人が入り込むことができる蔭空間を構成では、公共空間としての開かれた場であり、このことを考慮して陰+影による蔭空間を採用した。この蔭空間の気積が、時間と共に影が変化し、蔭空間が大きくなることや小さくなることがわかる。また蔭空間が出現しない時間帯も確認できた。そのため、スローな場を段上に計画し影が落ちるように設計した。



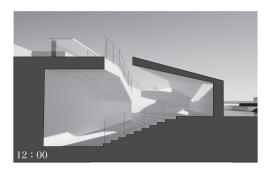






図6 陰+影による蔭空間の3時間ごとの変化

4-5 3時間ごとの蔭空間の変化

スローな場に構成された蔭空間は、少しの時間留まる場所であり、長時間留まることがないよう、1日の中で変化するように構成した。朝から夕方にかけて、蔭空間がスローな場の中で構成されるように、twinmmosion $^{\pm 1}$ でシミュレーションを行い天井面を構成した。(図 6)

4-6 シークエンス計画

ファスト&スローをコンセプトに平面的な計画を行い、蔭空間を利用して 断面的な空間体験を再現した。平面計画と断面計画を元にファストからス ローな場へ入り、またファストへ戻るまでのシークエンス計画(ステップ 1~ステップ4)を行った。(図7)

5 まとめ

現代のファストを重視した社会の中で、一息つける空間が少ない。目的を もった行動意外を許容できる空間が公共の場にあることで、少しだけスト レスを緩和した日常を過ごすことができるのではないだろうか。



ステップ1 酸による空間の想起により目に止まる空間を作り出す。ここでアプローチ方法と して際による空間の想起により場を認識 させる



ステップ2 目に留まった蔭空間の中に侵入する段階 とに、ファス | な道を外れて止まれる場 をつくる。



ステップ3 段上となった道空間の中で、眩しい、暑 いなどの逃避行動性からスローな場の中 で際空間となっている場に佇む。



ステップ4 スローな場で隙間時間を過ごした後、電 車やバスに乗るためにファス |な道に戻る

図7 シークエンス計画

参考文献

- 注1 座談会 スローとファストのはざまで http://jabs.aij.or.jp/pdf/1610_036-038.pdf
- 注 2 ヤンゲール著 北原里理雄訳 『外空間の生活とデザイン』
- 注3 空間構成要素に着目した暗い空間の特性に関する」研究 ・安藤瑞穂 古賀 誉章 平手 小太郎 日本建築学会学術公演梗概集 (関東) 2011年8月
- 注 4 広辞苑第 7 版 岩波書店
- 注 5 新建築データ https://data.shinkenchiku.online/

旧島田小学校と増田思想『風景』の言説との関係性についての考察 -旧島田小学校と NTH 計画案との比較から-

 M22006
 数下和真

 指導教員
 安田光男

 増田友也
 風景
 思想

 計画案
 E. S-System
 学校建築

1.はじめに

増田友也 (1914-1981) は京都大学工学部建築学教室にて教鞭をとる傍ら設計活動と独自の建築思想を展開し、1961-1981 年、遺作となる鳴門市文化会館を竣工する約 20 年もの間に計画案を含め 84 作品を設計し、その中で 19 の公共建築を徳島県鳴門市で手掛けている。また19 の内の12 棟が学校建築であるが、しかしながら現在では 6 棟が休校 廃校となっている状況であり、最近でも増田の名作である鳴門市民会館が取り壊されたばかりである。本稿では増田が手掛けた最後の学校建築である徳島県鳴門市旧島田小学校(以降、旧島田小と省略)と増田思想『風景』との関連付けられた鳴門市立工業高等学校計画案を主に比較対象として扱い、増田思想と実設計との関連性を明確化することで再評価の一端となることを本研究の目的とする。

旧島田小を含む増田の学校建築と増田思想に関係する既往研究は、西村らの「学校建築における増田友也の思惟」に関する研究」、門間らの京都大学増田友也研究室による鳴門市立工業高等学校(1963)の「景観」(以降、NTHの省略)。)、同じく門真らの「"Struktur und Freiheit"原稿の特徴と増田友也研究室設計作品」に関する増田直筆の原稿に見られる思惟と過去の教育施設計画案との関連性の研究。)などが見られる。しかし増田友也の晩年に設計された学校建築に多く見られる特徴である雁行型や実設計と『風景』を関連付ける指摘は未だされておらず、具体的な関連性について明らかにする。すなわち本研究は、増田友也の晩年に実際に設計された旧島田小を対象として、増田思想の『風景』がどのように具体化されているのかを、先行研究を参照しながら比較するものであり、増田研究室設計作品の晩年までを含めた作品と思想の関係性を明らかにする為の端緒として意義があるだろう。

本研究の研究方法として、増田の思想、主に『風景』に関する文献収集を行った上で、先行研究によって増田独自の『風景』との関連が設計においても明らかになった NTH 計画案を頼りに、実設計つまり旧島田小でも同様に『風景』が具体的な形で実現されていた事を明らかにする為、類似する以下の4点から分析・比較を行う。ブロック分類と結合・グリット・モジュールの構成及びズレ・室の独立性オープンプラン・内外の高低差。補足の資料として増田自身が執筆した「原稿」及び旧島田小の新築工事時点(詳細時期は不明)の上層平面図を参照する。主な比較には旧島田小学校2階平面図を使用する。

2. 増田友也の思想の遍歴

増田の思想は、大まかに前期思索「空間論」・中期思索「風景論」 そして晩年「存在論」の三つに分けられることは、先の3項で述べた 通りであるが要約すれば前期では空間が如何なる場合に形成されう るのかを日本の近世住宅の実測調査や海外の民俗調査報告書から研 究を行い、増田独自の空間への視座を得た後、日本建築の空間を西 欧思考で解き明かす中で、空間の建築化から風景の建築化へと拡大 させた。その中期「風景論」の中で重要な言説として挙げられるの が『風景』である。その他に『景観』あるいは『landscape』という 語句が見受けられるがほぼ同義語として用いられている*'。しかしな がらこれらの語句は一般的に我々が使用する所謂「風景」とは分け て考えなければならない。増田の用いる『風景』とは以下のように 常美される

"ある種の象徴的意味であってそれは地理学的景観にまとわりついている意味" *²

つまり、一般的に使用される客観的なもの・事物的な眺めという 概念ではなく、象徴的なものに対して意味を見いだした増田独特の 概念である。過去の芸術家達が日本の伝統的な住宅と庭の関係性の 中で、共通する構造を生み出したことで内部と外部は統一化され、 風景は建築となったように我々も新しい『風景』をつくる。 人間の 主観においてそこに既に存在している様式あるいは構造そして象徴 的意味が読み取られるならば、反対にあらゆるものを操作し象徴的 意味と構造が創られ、構造にわずかな変更を与えることで情緒的意味が帯びる**。 その時、 風景は人間性を与えられ『 風景』として成立 するのであろう。

3. 研究対象の概要及び晩年の学校作品

3-1. 鳴門市旧島田小学校

本研究で研究対象として扱う鳴門市島田小学校は、徳島県の東北端に位置する、北は播磨灘、東は鳴門海峡、南はウチノ海、西は小鳴門海峡と、それぞれ違った顔を持つ海に面した徳島県で二番目に面積が大きい島田島の山間に存在する小学校で1877年8月に前身となる島田小学校が創立され、後の1981年の7月に現鳴門市島田小学校が竣工された。増田の遺作である鳴門市文化会館が竣工されたのが1982年4月であり、学校建築としては顕著に建築表現が特徴的である。この建築は約10mの斜面地に対して沿うよう階段状に配置さ

Research on subjective experience given by Masuda thought and Masuda architecture-Targeting Shimada Elementary School and the Seto-cho district of Naruto City-

Yabushita Kazuma

れており、雁行型屈折壁と教室からグラウンドまでアプローチできるよう計画された屋上テラスが特徴的である。下層には幼稚園が上層には小学校機能が配置され管理者を含めた、それぞれが異なるエントランスからアプローチできるよう動線経路も巧みに計画されている。上記のデザインを含めて、出の深い庇のエントランス・象徴的な丸柱・ステンドグラス・ルーバー窓・壁とフラットルーフの取り合い部分の切り離し・直線的な構成に象徴的な曲線壁などこれまでのデザインが複雑に織り込められている。

3-2. 鳴門市立工業高等学校計画案(NTH計画案)

本研究で比較対象として扱う NTH 計画案とは、1963 年、将来的には発展の展望も示唆されていたが、その当時は敷地を含んだ広範囲が低湿地で連畑が広がっていた場所である鳴門市中江越において鳴門市立工業高校を計画、結果的には実現しえなかった作品である。増田が『風景』を用い設計内容を説明した幾つかの作品の中で、先行研究によって関連性が明らかになった作品であり、NTH 計画案設計説明書において『風景』と同義語の景観について述べられた箇所を引用する。

"景観とは「事物的自の上に読みとる人間的意味」" "景観の創造というのは、…事物的自然の視覚的な空間構造化"**

視覚的に構造化された状態であり意味を象徴する、つまり設計において「景観」が現れる手法として E.S System という具体的なシステムが導入されている。設計説明書「(Ⅱ)実施例 - NTH の場合 - 」の「5.1 用の計画」で説明されているが詳細は、比較検証で記述を行う。

4. 旧島田小学校と鳴門市立工業高等学校計画案の比較

先ほどの E.S System が導入された NTH 計画案のプランと旧島田小のプランから類似する4つについて比較を行うことで、旧島田小において増田独自の『風景』との関係性の有無を明らかにする。

4-1. ブロック分類と結合

NTH では建築を構成する機能がブロックとして分類され、それらの用途がコアを介して結合している形式である点が類似しており、NTH 計画案では建物内を構成する機能を次のように、①管理関係②教室関係③実験関係④実習関係の4つのブロックに分類され、各ブロックが同様にコアから各室に結合する形式を取っている。旧島田小でも同様に機能を①管理関係②教室関係③実習関係として、合計4ブロックとして分かれており、それぞれがメインのコアとなるホールや小コア**を介して接続される形式となっている。またコア同士をNTHにおいては、渡り廊下によって結ぶ形式を取っているが旧島田小では段差を伴う廊下によって結ぶ形式を取っている。新築工事上層平面図**を参照すると真南に伸びた②教室関係の廊下を(B)、真西に伸びた廊下を(C)とするとそれぞれにあたる部分の計画が変更されていることがわかる。まず(B)にあたる部分が現在では真南に真っ直ぐ伸びた形成であるのに対して、当初は L 字で計画されており、長辺方向の廊下幅は同じく 2750mm であり、短辺方向の廊下幅は

3600mmであり、またL字の角部分では室内に多くみられるドーム型のトップライトが設えてあり、突き当りは当初南側から西側にかけて計画された屋外テラスと行き来できるような設計であったことがわかる。(C)においても、現在と同様に廊下幅 2750mm で計画されているが、突き当り右側には同じくトップライトが設えられた休憩コーナーとして室が配置され突き当りは西側の屋外テラスに通じる計画とされていたのである。1つの仮説として、NTHではブロックを形成するコアが複数配置され、段階的な関係性が内部で起こる過程を重要視していたが、旧島田小においても(B)と(C)が当初の計画から変更されているもののコアと同等のスペースとして計画され各ブロックを構成していた可能性は高いと考えられる。



fig.1 旧島田小学校上空写真(徳島新聞デジタル版 2020/07/20 より)



fig.2 旧島田小2階平面図(鳴門市役所所蔵図面及び実測調査より筆者作成)



fig.3 旧島田小におけるブロック分類及びコア該当部(平面図より筆者作成)

4-2. グリット モジュールの構成及びズレ

NTH 計画案ではブロックの配置を構成する教室は 8000mm×8000mm、工場等は 17000mm×17000mm の正方形で構成されており、それらがコアごとに渡り廊下で繋がれ、廊下はフィボナッチ数列を用いたモジュールによって任意の長さとなるように E.S System が導入されており、廊下幅は 1,880mm を基準としている**。室は正方形として寸法化されているが、1 ブロックにおいても、また敷地全体に対する標準的なグリット構成は見られない。旧島田小では、敷地全

^{*}京都美術工芸大学大学院 工芸学研究科建築学専攻

^{*}Kyoto Arts and Crafts University, Graduate School Applied Art, Department of Architecture.

体が 7200mm×5825mm のグリットで構成されていることは明らかで あり、また全体の室の配置においても、どちらか一方の辺 7,200mm あるいは 5,825mm に準じて行われており、一辺長さの比を変化させ て室の寸法が決定されている。グリットが南北方向に長辺を取る長 方形であることは、恐らく斜面地に沿った計画とする上で奥行きに 対する寸法が困難であったことから短辺方向は、長辺より-1,375mm となる 5.825mm で決定されたのであろう。重要な点は視覚的意味化 つまり構造化にある。矩形単位の秩序をもった配置によって未来に 対応できる様式が視覚化されている状態つまり増築や改築に対する 想像が容易にできることが、日本の伝統的住宅が備えていた平面的 な構成の特徴であり、時間的な構造化によって『風景』として認識 されるよう意味を与える1つの要因である。もう1つの要因は、様式 のようにルールとして認識された状態から僅かな変化を与えること で生まれる意味あるいは感情に近いものであろう。旧島田小では、 ある室が寸法を変化させることで NTH 計画案と同様、全体が標準的 な格子に乗らない形式となっている為、NTH 計画案と同様に全体構 成から与えられる象徴性と意図的なズレによって起こる情緒的な意 味合いが同時に内在する『風景』が形成されているのである。

4-3. 室の独立性 オープンプラン

グリット化及びシステム化によって配置された NTH 計画案のプラ ンは、教室同士がそれぞれ独立していることによって外部空間との 積極的な関わりが行われている。これは増田が日本の伝統的な住宅 と庭との関係性において、内部空間と外部空間に共通する構造が存 在したことで内部と外部を統一することが達成されていたことに加 えて、「原稿」で述べられている open planning の実現を目的とした結 果であろう。NTH 計画案の設計趣旨では、内外の統一性について触 れられていないが、同じく E.S System が用いられた京都府立高等学 校(別名、K-SHS)では、「外部空間を積極的に建築化」することで、 「内外空間に視覚的に複合された統一」をつくる日本の過去の住宅 と同様の手法を用いて内外を統一するという説明がされていること から同様の意図があったことも明らかとなっている**。つまり外部の おいては、内部と同様の構造化あるいは建築的な要素を取り入れ、 内部においては、外部と同程度の関係性や室同士の接続に関しては 外部との繋がりよりも軽薄化することで、より外部との関係性が強 調される。旧島田小においては、全体のプランニングを比較すると 独立された室の数は限られているが、屋上庭園と連続的に計画され ている主な教室は、1 つの室単位で平面的に独立されており、外部空 間に対しては深い庇を有しながら積極的に開かれた形式をとってい る。また外部が屋上庭園として計画されており、その屋上庭園が室 と同じ 7200mm×5825mm のグリット形式を持つこと、そして屋上庭 園には、管理関係の室側に計画されたテラスに設けられたフラワー ポットが外周に対して同等かそれ以上の深さで設けられている。こ れらを踏まえると NTH 計画案で行なわれていた内外の視覚的構造化

による統一つまり全体性から『風景』となることが目指されていた ように、旧島田小でも同様の概念があったと言えるだろう。

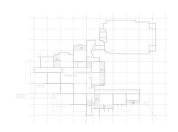


fig.4 グリット及びズレ該当部分(平面図より筆者作成)



fig.5 室の独立配置図 (参考文献より筆者作成)

4-4. 内外の高低差

先ほども参照した「3.景観について」その中の一文には、学校建築 の存在に対する意味としてこのように書かれている。

"「学校建築に与えようとする象徴的意味」は「機械的訓練の場としての学校の image」と「青年期の団体生活の想い出と云う如き単なる情緒的意味」の「両者の 相即の実現」であり、それは「知的啓発の場としての雰囲気の醸成」である。"*°

つまり学校建築に対して与えられる意味は、学習を目常的に行う 場所としてあるいはある種の道具的なものとして支配されるイメー ジと、一方で道具的な役割を果たした後に現れ出る非日常的な思い 出としてのイメージが両立されることである。視覚的構造化でも触 れたように、時間による変化にも柔軟性をもって対応しつつも、保 持し続ければならない視覚的要素がここでも存在することを示して いる。この後に、具体的な計画内容として、NTH 計画案の建物は運 動場より建物の敷地が 1m 高く設定されていることに触れ、理由は単 なる機能的な側面だけでなく、象徴的な意味を持たせる為であるこ とが示されている。旧島田小が設計された敷地は、島田島中央付近 の山間にあった棚田に位置しており、ほぼ同時期に設計された徳島 県内の他の学校建築が傾斜地ではなく、山裾に計画されていること から比べて考えてみても難しい敷地であったことが分かる。増田は この敷地をならす事は極力抑えて、元の風景であった棚田を彷彿と させる様な階状の外観を約 10m の高低差をもつ斜面に沿って計画を 行っている。運動場から見上げる旧島田小は、階状に出来上がる建 物の全体像から学び舎としての象徴性が生徒達から読み取られ、ま た部分である見慣れた教室群がこちら側に情緒的意味を開示する。

Research on subjective experience given by Masuda thought and Masuda architecture-Targeting Shimada Elementary School and the Seto-cho district of Naruto City-

Yabushita Kazuma

象徴的な学び舎としての全体像と情緒的な思い出としての部分、これらが両立され熟成した雰囲気が運動場から校舎を繋ぐ階段に引かれた軸線上に漂っている。

5-1. 結論

以上、NTH 計画案に関わる『風景』を具体化させる方法の趣旨として説明されていた要素の中から次の 4 点を抽出し、「ブロック分類と結合・グリット・モジュールの構成及びズレ・室の独立性 オープンプラン・内在の高低差」これらの要素と旧島田小の具体的な計画を比較した結果として次のように纏められる。

NTH 計画案と同様に全体の計画として標準的な形式に捉われない E.S-Systemで実現しようしていたような全体構成が旧島田小で再現されていた。『風景』が単なる対象物としての自然として扱われるのではなく、人間の主観において読み解き、その中に視覚化された構造及び象徴的・情緒的意味である事を定義した上で、『風景』を建築化したのである。その方法として NTH 計画案を含めた計画案の中で実現化することが目指されていたが、その多くはクラスター型の大規模なプランであった為、残念ながら実現には至らず、増田の理念が学校建築としては実る事は叶わなかった。しかし鳴門で再び機会を得ることとなり、現実的なブランに再構築したのが雁行型であったと考えられる。このことから旧島田小の設計は、即時的に行われたものではなく、長い年月により成り立った論考や計画案の上で計画され存在している建築であることだけでなく、晩年に至るまで増田独自の『風景』が増田思想において改めて重要な概念であることが再確認できたのである。

5-2. 今後の展開

これまでで明らかになった門間光らの「増田友也 "Struktur und Freiheit" 原稿の特徴と増田友也研究室設計作品との関連」では増田思 想となる風景が記述された原稿をもとに 1966 年までに設計された建 築には思想が反映されていることを示されたが、1981年の増田後期 思索にあたる実設計においても反映がみられるため、今後より一層 の増田思想と実設計の関連性が研究される一考になればと考える。 しかしながら、現段階では論考として至らない点が数多くあること は理解している。NTH において E.S.Syesem によって寸法体系を形成 したこと及びグリット構成が正方形であることにより、全体性が成 り立ち『風景』として読み取られるが、旧島田小において正確な寸 法体系が図れていない。後者の場合は、NTH 計画案では鉄骨構造で あり、旧島田小では壁式コンクリート構造の為、力学的な差異とも 考えられるが今後より関係性を明らかにする必要があるだろう。さ らに旧島田小独自の特徴であるスキップフロア及び運動場と連続的 に計画されている屋上庭園なども『風景』との関連を考察する要因 となるだろう。論考として成立させる為には、以上の点を考察する こと及び現段階の論考を深めることは不可欠であり、今後の課題で ある

参考文献

- 西村和起「建築家 増田友也も思索と造形についての考察」『首都大学東京卒業論 文集』
- 門間光・田路貴浩 (2020) 京都大学増田友也研究室による鳴門市立工業高等学校 (1963) の「景観」Vol.60,pp.561-564,
- 3) 門間光・田路貴浩「増田友也 "Struktur und Freiheit" 原稿の特徴と増田友也研究 室設計作品との関連」『日本建築学会計画系論文集』Vol.87,No.793,pp.632-643
- 4) 市川秀和 著 (2014)「建築論」の京都学派―森田慶―と増田友也を中心として (近 代文藝社新書)
- 5) 多木浩二 著(1982)『眼の隠喩 視線の現象学』
- 6) 谷村千絵「鳴門市における増田友也による学校建築に関する予備的考察-北麓東幼稚園、北灘西幼稚園、瀬戸幼稚園、島田幼稚園の園舎観察から-」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』No.36,2022,Feb
- 長岡大樹 (2010)「増田友也の建築と壁の造形」『日本建築学会技術報告集』 Vol.17.No.36,pp.735-738
- 8) 西村和起・水島あかね・坂戸省三 (2016)「学校建築における増田友也の思惟に関 する研究―鳴門市島田小学校を事例として」『日本建築学会大会学術講演梗概』 pp.219-220
- 9) 森田慶一 著(2011)『建築論』東海大学出版会
- 0) 前田忠直 著(2002)『建築論断片』(株)尚文堂
- 11) 増田友也(1999)『増田友也著作集 I~V』ナカニシヤ出版
- 12) 松隈洋 著(2013)『残すべき建築』誠文堂新光社
- 13) 門間光・田路貴浩(2021) 京都大学増田友也研究室による双ヶ岡環境工学研究所計画 (1966) における「風景」『日本建築学会計画系論文集』 Vol.86,No.790,pp.2731-2742,Dec
- 14) 門間光・田路貴浩「京都大学増田友也研究室による日本万国博覧会会場計画 (1966) の特徴 西山卯三もしくは丹下健三による会場計画との比較を通して」 『日本建築学会計画系論文集』Vol.85,No.768,2020,Feb
- 15) 市川秀和「空間の現象・Ethnos の風景・建築以前の有一時 増田友也の思索の 道:空間論から風景論、存在論へ —」『福井大学地域環境研究教育センター研究 紀要』No.19,pp81-91,2012
- 16) 福田頼人・椿地浩之「鳴門市に残る増田友也の建築」『阿波学会紀要』 Vol.61,pp.193-194
- 17) イーフー トゥアン 著 山本浩 訳(1993)『空間の経験:身体から都市へ』筑摩書房
- 18) エドワードレルフ 著 高野岳彦 阿部隆 石山美也 訳 (1999) 『場所の現象学:没場所 性を越えて』 筑摩書房
- 19) エリオットブライアン 著 未包伸吾 訳 (2019)『思想家と建築 ベンヤミン』 丸善出版
- 20) オギュスタンベルク 著木岡信夫 訳 (2011)『風景という知-近代のパラダイムを超 えて』 世界思想針
- 21) ガストン バシュラール 著 岩村行雄 訳(2002)『空間の詩学』筑摩書房
- 22) クリスチャン / ルベルグーシュルツ 著 加藤邦男 田崎祐生 訳 (1994) 『ゲニウス・ロキ・建築の現象学をめざして』 住まいの図書館出版局
- 23) クリスチャン ノルベルグ=シュルツ 著 加藤邦男 訳 (1987)『実存 空間 建築』 鹿島 出版会
- 24) 田路貴浩 著 (2023) 『増田友也の建築世界』英明企画編集株式会社

図版出典

fig.1 旧島田小学校上空写真 (徳島新聞デジタル版 2020/07/20 より)

fig.2 旧島田小2階平面図(鳴門市役所所蔵図面及び実測調査より筆者作成)

fig.3 旧島田小におけるブロック分類及びコア該当部 (平面図より筆者作成)

fig.4 グリット及びズレ該当部分(平面図より筆者作成)

fig.5 室の独立配置図(参考文献より筆者作成)

注釈

- *¹)門間光・田路貴浩「増田友也 "Struktur und Freiheit" 原稿の特徴と増田友也研究室設計 作品との関連」『日本建築学会計画系論文集』Vol.87,No.793,pp.640-641,
- *²) 『増田友也著作集 I』、ナカニシヤ出版、1999、p.218
- ***)門間光・田路貴浩「増田友也 "Struktur und Freiheit" 原稿の特徴と増田友也研究室設計作品との関連」『日本建築学会計画系論文集』Vol.87,No.793,pp.640-641,
- **¹門間光・田路貴浩(2020)京都大学増田友也研究室による鳴門市立工業高等学校(1963) の「景観」Vol.60,pp.563,
- **) fig.3 旧島田小におけるプロック分類及びコア該当部の(B)と(C)を小コアと仮定
- *6) 田路貴浩 著 (2023) 『増田友也の建築世界』英明企画編集株式会社、pp.112-113,
- **¹)門間光・田路貴浩(2020)京都大学増田友也研究室による鳴門市立工業高等学校(1963) の「景観」Vol.60,pp.563,
- ***)門間光・田路貴浩「増田友也 "Struktur und Freiheit" 原稿の特徴と増田友也研究室設計作品との関連」『日本建築学会計画系論文集』Vol.87,No.793,pp.640-641,
- **^{*}門間光・田路貴浩(2020)京都大学増田友也研究室による鳴門市立工業高等学校(1963) の「景観」Vol.60,pp.563,

*Kyoto Arts and Crafts University, Graduate School Applied Art, Department of Architecture.

^{*}京都美術工芸大学大学院 工芸学研究科建築学専攻

【編集後記】

本誌は学生が卒業制作、修士研究で作成した梗概の 最終提出物を集約して掲載している。書式は建築学 会の梗概集を参考にしており、形式は PDF データ である。編集は Adobe In Design を使い、京都美術 工芸大学附属図書館梗概集編集部会のメンバーで 個々のデータをそのまま配置するかたちで行った。 学生によってバラツキが生じているが、その点はご 容赦いただきたい。内容に関しても文章や引用の不 備など未熟な点を多々気づかれるであろうが、御批 判、御鞭撻たまわりますようお願いする次第である。 号を重ねる中で精度を高めたいと考えている。

京都美術工芸大学大学院修士研究梗概集 第2号

令和6年3月31日 発行

編集 京都美術工芸大学附属図書館梗概集編集部会

部会長 高田光雄(副学長・大学院研究科長) 副部会長 山内貴博(建築学科・付属図書館副館長)

委員 白鳥洋子(建築学科) 委員 古閑謙太郎(芸術学部) デザイン 岡達也(美術工芸学科)

発行 京都美術工芸大学 京都府京都市東山区上堀詰町 272 075-525-1515

